

ローベルト・ムージルとアルフレート・ケル
1927/28年の冬
— 「ケル60回目の誕生日」のスカンダルについて —

長谷川 淳 基

Robert Musil und Alfred Kerr
im
Winter von 1927/28

Über den Skandal um „Kerrs 60. Geburtstag“

Junki HASEGAWA

I 始めに

1927年は作家ローベルト・ムージルと批評家アルフレート・ケルの関係を考える上で、特別な年であった。この年の始め1月、ムージルによる「リルケ追悼演説」があり、ケルはこの講演について筆をとり、批評を発表した。続いて2月にはムージルのラジオ出演があったが、ケルみずからもこの番組に出演し、ムージルを紹介する労をとった。

年も押し詰まった今12月、ケルはめでたくも60回目の誕生日を目前に控えているのであった。ムージルは日頃の恩に報いるためとばかりに、ケルの誕生日を祝うエッセイを発表するのであるが、図らずもこのエッセイがきっかけとなって、それゆえに当然のことながらケル並びにムージルは渦中の中心人物として、そしてドイツの主要な出版人、文筆家、知識人をも併せ巻き込んだ、大スカンダルが起きるのである。ムージルはこのとき47歳、もはや『テルレス』の原稿を抱えてケルのもとを訪ねた「若い生徒」ではなかった。そしてケル60歳、ベルリンきっての劇評家・ジャーナリストとして君臨していた。

今回のスカンダルに際して、この師弟はどのように発言し、振る舞ったのか、ケルはこの時期ムージルをどのような人間であると見なし、事件の経過の中でムージルにどのような役回りを期待したのであろうか。ムージルの側について言うならば、ムージルは師ケルが期待する通りにものを考え、そして行動したのであろうか。時が過ぎれば人と人の関係は変わる。変化してしまった、つまり新しい関係に不快を覚えた側が、新しい関係を拒否し、関係そのものを断ってしまうことなどは人と人の間の自然である。師ケルと弟子ムージルの場合はどうであったのか。以下、今回のスカンダルにおけるムージルとケルの関係について考察する。

II ムージルのエッセイ「ケル60回目の誕生日に寄せて」

ことの発端はムージルのエッセイであった。1927年12月22日金曜日、ベルリンの週刊新聞「リテラーリッシュェ・ヴェルト」にムージルのエッセイ「ケル60回目の誕生日に寄せて」が載っ

た。

アルフレート・ケルは1867年のクリスマス12月25日に、ブレスラウに生まれた。そして今1927年12月22日、ケルの60回目の誕生日はこの日から数えて3日後に迫っていた。若くして名を成したケルであるが、1919年以降彼はベルリンの有力新聞「ベルリナー・ターゲブラット」紙の専属フェュトニストに納まり、まさに名実共にベルリンを代表する劇評家・ジャーナリストとしてその地位を不動のものとしていた。そのケルが60回目の誕生日を迎えるにあたり、これを祝う記念の本が出版された。ケルに特別の恩義を感じているムージルは、しかしながらこの本に寄稿するタイミングを失ってしまった。

遡ること3ヶ月前、ムージルはチロルからベルリンのケルに宛てて、一通の手紙を書き送っている。

エッツ／チロル
謹啓 ケル様

1927年9月30日

誕生日をお祝いするご本のこと、フィッシャーが広告を出してしまい、そのため、この件について、クリスマスまでの秘密として口をつぐんでいる必要がなくなってしまうました。この本に私の名を連ねさせていただくことにつきましては、かなわぬことになってしまいました。まことに申し訳なく思っております。何と申しましても、シュピロ氏の側からの連絡がいかにも遅きに失しており、またその連絡の内容も全く要領を得ないものであったために、結果、この原稿依頼について愉快的気持ちにはなれなかったのです。このことは別にして、私の自由になる時間ということから申しますと、どう都合をつけたにせよ、申し出に応じることについては、あるいは果たせなかったのでは、と考えております。あなた様に対する私の尊敬の気持ちにつきましては、単独行を旨とする人間としてこれを証明できますことをみずから願っております。

敬具

変わらぬ恭順とともに

ローベルト・ムージル (BI, 425f.)

この手紙を受け取ったケルは、自分に対し以前のままの変わらぬ態度で手紙をよこすムージルに、あらためて師に忠実な一人の弟子の姿を認めたことはまちがいない。しかし、その忠実ぶりは相変わらず独特のものである。ムージルは今、他の様々な人物たちと一緒にあってケルの誕生日を祝うことを拒んだのである。この手紙でムージルはシャピロをシュピロと書き違えている。

ムージルの言うシュピロ氏 Herr Spiro とはヨーゼフ・フリードリヒ・シャピロ Josef Friedrich Chapiro (1893-1962) のことである。シャピロはこのとき30歳であった。ケル60歳、ムージル47歳からするとずっと若かった。シャピロの名前は前年1926年1月22日のトーマス・マンの朝食に結びつく。この日、トーマス・マンはシャピロとパリのホテル「パレ・ドルセ」のカフェで朝食を共にした。シャピロはケルに同行してパリにやってきたものと思われる。この日の前々日1月20日、「国際平和のためのカーネギー基金」による招待講演を終えたトーマス・マンは引き続いて催されたドイツ大使館でのレセプションに出席した。このレセプションにはアルフレート・ケルも招待を受け、出席していた¹⁾。

上の手紙の文面によると、ムージルはシャピロに対しあまりよい印象を抱いていなかったようである。この本の表題、そして表紙のレイアウトを眺め、そして何よりも、ちょうちん持ちが書いたような、シャピロの文を読んでみると、シャピロからムージルに届いた原稿依頼の書

面を、当初から無視、あるいは拒否する気持ちがムージルに働いていたとも考えることができそうである。シャピロには、ケルとの関係を利用して自分の名を冠した書物を出したいとの目論みだけがあり、その一方、この手の本が、本当の意味でケルの誕生日を寿ぐものとなりうるのか、ムージルはこうした点を察知し、シャピロに不信感を覚えたのではなからうか。

この点とはもかくとして、60回目の誕生日という格別の機会に際し、自身の文章をもってこれを寿ぐ機会を失したことについて、大恩ある師に対して申し訳ないと言いつつも、必ずや別の形で十分な償いを果たすと言い切る口調に覗くムージルの自負、自己の仕事への自信。ケルへの尊敬の気持ちを明らかにすることについては、自分は一人で行動したい、と言い添えるムージルには、庇護者としてだけのケルとの関係を軌道修正したいとの意志が働いていたに違いない。

ムージルは約束を果たした。

1927年12月22日、リテラーリッシュェ・ヴェルト紙にムージルはエッセイ「ケル60回目の誕生日に寄せて」を発表した。このエッセイについては、すでに複数の機会に言及しているので⁹⁾、ここでは詳細を省くが、ムージルのこのエッセイの内容は、ケルのこれまでの業績、仕事についてのあらためての紹介と賞賛である。全体の骨子は、この論に先立って「ノイエ・ルントシャウ」誌に発表されたヴィリー・ハースの論究「批評家ケル」—ケルに関して、この時期ハースが書くことになる5本の論究のうちの、いわば「第一論文」—の趣旨に重なるものと考えることができ、ムージルのエッセイ「ケル60回目の誕生日に寄せて」を、ケルに近い作家、つまりケルに対してムージルのような位置関係にある作家の書いたものと考える限りにおいては、目を見張らされる類いのことは書かれていない。ハースのこの「第一論文」については、本論の先で詳しく論じることになる。

ムージルの名誉に関わるということで、もう一言追加すると、ハースが最初1927年にケルについて考えたことは、ムージルの方が1910年にすでに考えていることである。ケル60回目の誕生日を目前に控えた今の時期、1927年、ムージルがハースのケル論を読んでいなかったとは考えられない。しかしながらムージルにとって何ら目新しいことは書かれていなかった。ケルは今なお読むに値する作家である、ムージルは、そしてハースはそれぞれの論文でそう読者に向かって訴えかけ、これを結論にしている。

ケルの誕生日を祝うムージルのエッセイ、そうした目的で書かれたこのエッセイには、そういうわけで世間の耳目を引く類いのことは書かれていなかった。従って、このエッセイがきっかけとなって大論戦が巻き起こり、結果ムージル自身がのっぴきならない苦しい立場に立たされることになるなどは、当のムージルにも想像だにできないことであった。

Ⅲ スキャンダルへ 「編集メモ」とローヴォルトの「手紙」

ムージルのこのエッセイが発表された4週間後、すなわち年が明けた1928年1月20日、同じリテラーリッシュェ・ヴェルト紙に「編集メモ」なる記事が載った。最終頁、すなわち第10ページのごく小さな記事で、よくよく注意していないと見落としてしまいそうな扱いの記事である。その「メモ」は四つの項目からなり、そのうちの一つが以下のものであった。

編 集 メ モ

ローベルト・ムージルの筆になる「ケル60回目の誕生日に寄せて」の論文の最後は一同論文はこのタイトルで我々のクリスマス号に掲載されているのであるが、印刷の際に手違いが生じ、残

長谷川 淳 基

念ながら一字一句まで正確に印刷するということができなかった。著者の了解のもと、我々はこのことを確認するにとどめ、あらたな追加校正については見合わせるものとする⁴⁾。

これも一見したところ特に問題になるところもない編集部「メモ」であるが、ケルはこれに目を留めた。ケルはペン先を研いだ。一週間後の1月27日、ケルとしてはこの鋭いペンを振るわざるをえない記事が、やはりリテラーリッシュェ・ヴェルト紙に載った。ローヴォルトがハースに宛てた手紙である。

「リテラーリッシュェ・ヴェルト」への投書

親愛なるハース様

フライブルクを旅行中ですが、ベルリンの演劇批評を論じたあなたの記事についてのケルの回答を、偶然目にしました。ケルは、出版人としての私についてもっと正確な理解を持つべきであり、業務上私に関心を抱いている雑誌の編集者に関して、編集にたずさわるその者の独立権限を制限することなどは、私にとって全く想像だにできないことである点について承知すべきです。我々兩人には、この外ばかかっているとしか言いようのないことです。というのも12月始めのこと、「ノイエ・ルントschau」に載ったあなたの論文を読ませて頂いた折に、なぜこの論文を「リテラーリッシュェ・ヴェルト」に掲載しなかったのかと、私はあなたを咎めだてたのでしたね。この点はさておき、私はケルの現在の批評活動を完全に拒絶しており、これはただ単に業務上の理由—おそらくはケル博士はこれを理由と推測するでしょうが—、ただこれだけが理由でないことを、我々兩人ともに理解しているわけです。

敬具

エルンスト・ローヴォルト⁵⁾

ケルは反論の記事を一気に書いた。3日後、1928年1月30日ベルリナー・ターゲブラット紙夕刊に「拒絶される」が載った。この時期のベルリンを騒がす大スキャンダルの初日の光景であった。

拒絶される

I

出版社主ローヴォルト氏は文学関係のさる定期刊行物の中で、私の（他の新聞雑誌等での）「批評活動」を「拒絶する」と発言している。ちなみに彼は今現在もその刊行物のオーナーの一人であり—その刊行物の二ページ分については、少なくとも絶対の発言権を持っていると推測できる。

大変に残念なことだといわざるを得ない。

かく言う私のほうでも、その新聞に寄稿するようにとの再三にわたる彼からの要請を拒絶してきており、こうしたことが事態を一層深刻にしまった。

事の真相をお話ししよう！

II

この（金銭に絡んで、多様な状態を作ることで、関係の人々に活気をもたらしている）出版社と懇意にしている文筆家は、二つのグループに分けられる。すなわち：

拒絶の一つ二つなどは、支払いが受けられることに比べれば、何ら目くらまを立てるようなことではないとお考えになる諸氏と、—そして、この新聞への財政上の支援を拒絶しなかった方々—とである。

III

二つの文筆家グループ、地獄の沙汰も金次第、万事はお金と考えるグループの方々、並びに物言わぬ持分所有者の方々共に、以下の事態については内部的な抗争が招いた結果であることをお認めになるはずである。

ローベルト・ムーゼルの筆になる「ケル60回目の誕生日に寄せて」の論文の最後は一同論文はこのタイトルで我々のクリスマス号に掲載されているのであるが一、印刷の際に手違いが生じ、残念ながら一字一句まで正確に印刷するということができなかった。著者の了解のもと、我々はこのことを確認するにとどめ、あらたな追加校正については見合わせるものとする。

ムーゼルは胸のうちではこう思っているだろう、「隠れた意図を感じ取るとき、気分とは言わず、文意についても台無しにされている」と。しかしながら一技術的なミスに影響力を行使したのは誰か？例の片方のオーナーか？文学分野の、物言わぬオーナー兼利害関係者たちか？

なんとまあ、それにしても気まぐれな妖精コボルトが印刷工に扮していたとは。この妖精のやることといえば、いたずらばかり。もしも仮に、このいたずらっ子が字句の通りに印刷しないのなら、『太っちょの殉教』Das Martyrium der Dickenという愉快な本のタイトルが、『一味の殉教』Das Martyrium der Klickenという気分が暗くならないでもないタイトルに置き換えることにもなろう。何が飛び出してくるのか、これぞ楽しみというべきであろう。

IV

幻想…聖マルコ教会のブロンズの馬の前に、一人の博労が立っていた—彼はこのブロンズの馬たちを拒絶するのであった⁶⁾。

先ずは、上に引いた「拒絶される」にケルが書いている「二つの文筆家グループ」であるが、いささか分かり辛い表現である。以下で言及するケルの他の文章—1928年2月6日のベルリナー・ターゲブラット、同じ28年2月24日のリテラーリッシュェ・ヴェルトに載った記事など—を助けにして、ケルの言わんとするところを汲むと、リテラーリッシュェ・ヴェルト紙は財政的に赤字が続いていた。ローヴォルト出版に縁のある作家のうちの幾人か、あるいは幾十人かが、ポケットマネーを出してこの「リテラーリッシュェ・ヴェルト」に資本参加し、同紙の存続に尽力した。こうした作家のうち、この事実を公にした者もいれば、そのことに口をつぐんだものもいた。作家が自分のお金を使ってまでリテラーリッシュェ・ヴェルト紙を支えようとした理由であるが、ケルの考えるところでは、財政的に重荷になってきた「リテラーリッシュェ・ヴェルト」から手を引きたいと考えるようになったエルンスト・ローヴォルトに、引き続き「リテラーリッシュェ・ヴェルト」に留まってもらうためであった。出資した作家たちには、二つの利点があった。一つはローヴォルト出版社との絆が維持できること、そしてもう一つはもちろん安定した執筆場所の確保である。自分のために自由に使える執筆の場を確保するということは、作家にとって大きな利益がある。同じことを別の言い方で言うならば、こうした作家たちがリテラーリッシュェ・ヴェルトの編集に参加していた、ということである。以上が一方のグループである。

もう一方のグループの作家とは、ローヴォルト出版から本を出しているその他のすべての作家のことであり、ローヴォルト出版社から謝礼、あるいは印税を受ける作家たちである。

ただしケルが、ローヴォルトは「金銭に絡んで、多様な状態を作ること、関係の人々に活気をもたらしている」と表現しているように、両グループの作家たちの中にはローヴォルト出版と個々別々の形の契約関係を持つ者もいた。たとえば「前払い」である。ムーゼルはそうした一人であった。

後段の「片方のオーナー」とはローヴォルトのことであり、「文学分野の、物言わぬオーナー兼利害関係者たち」とは、もちろん先述の共同資本出資をしている作家たちのことである。彼らは「リテラーリッシュ・ヴェルト」の編集業務を分担して受け持ち、そのリーダーはもちろんヴィリー・ハースである。

ムージルは、ケルの言うように、ローヴォルトに繋がる代表的作家の一人である。が、ハースの側からすると、ケルと深い親交を持つ作家である。このムージルがケルについての文を「リテラーリッシュ・ヴェルト」に書いた。そして、結果として、ムージルの意図を十分に反映していない文が掲載された。これについてはジャーナリズム業界の対立抗争が影響している、とケルは言うのである。すなわち、ケルとローヴォルトとの対立のことである。そして、とケルいわく、ムージルは著書をローヴォルト出版から出しており、かつリテラーリッシュ・ヴェルト紙の常連作家でもあり、その他特例的なつまり小説の執筆を前提とした「前払い」により（ここでは直接は言われていない）一扱を受け持っている、従って今回の場合のように原稿がムージルの意図一師ケルを思いのたけ賞賛したい、等一のとおり印刷されなくてもローヴォルトの手前、黙って我慢するしかない、従って自分が、すなわちケルが、代わりにムージルの不満を書いてやる。ケルの言わんとすることはおおよそ以上である。

エルンスト・ローヴォルトは、この当時急成長を遂げた出版人として知られていた。1887年ブレーメンに生まれたローヴォルトは出版人として天性の才を持っていた。出版社を次々に渡り歩き1913年にはS. フィッシャー社の業務代理人も務めた。そして今1927年、彼はこの時40歳、ケルより20歳、ムージルより7歳年下の若き出版社主であった。表現主義の詩集などを手がけ、新傾向文学に理解を示し、後述するブロンネン、そしてトゥホルスキー、ムージルのものなど、またその他アメリカ文学も意欲的に出版していた。そして今に先立つこと2年前、ローヴォルトは1925年にハースと共に「リテラーリッシュ・ヴェルト」を創設したが、「リテラーリッシュ・ヴェルト」はローヴォルト社に対して系列子会社の関係にあった。

一方のヴィリー・ハースであるが、彼は1891年プラハに生まれた。プラハで法学を学び、学生時代にすでに文芸雑誌の編集を手がけ、フランツ・カフカ、マックス・ブロットらと親交を結んだ。1914年、ライプチヒのクルト・ヴォルフ出版に職を得るが、第一次大戦の勃発と共に従軍、戦後は映画評論、映画の台本を書くなどして文筆家として立ち、上記のように1925年に、ローヴォルトとリテラーリッシュ・ヴェルト紙の発行を開始し、彼はこの週刊新聞の編集長となったのである。

ムージルとローヴォルトとの関係は、1924年にムージルの小説集『三人の女』がローヴォルト社から出版されたことに始まる。ローヴォルトはこの時以降、ムージルに毎月の「前払い」を開始し、経済面で彼を強力に支えることになるのである。

ムージルと出版社ということで、ザムエル・フィッシャーとムージルの関係についても言及しなければならない。

S.フィッシャーは1859年、ハンガリーとスロヴァキアの国境の町で生まれた。この時68歳、トーマス・マン、フーゴー・フォン・ホーフマンスタールなどの作品を扱う、ドイツ随一の出版社主であった。

ムージルはかつて1914年、S.フィッシャー社の看板雑誌「ノイエ・レントシャウ」に、編集者として迎えられた。マルタとの結婚を機に、ウィーン工科大学の図書館司書に収まったムージルは、しかしながらその仕事に喜びを見出すことができず、病気を理由に長期の休暇を取ったりしていた。そして1914年2月、意外な所からムージルに幸運が訪れた。意外な幸運の訪問、

すなわちムージルは「ノイエ・ルントschau」の編集者として招かれることになったのである。「意外」とは、1911年に出たムージルの『合一』が、その当時「ノイエ・ルントschau」で文字通りに酷評されたことがあったからである⁷⁾。そのことを考えると、ムージルにこの雑誌の編集人のポストが与えられることについては、何らかの、とはつまりムージルを再評価する特別の状況が改めて発生したことになる。ケルとの関係、いわゆるコネが、ムージルに有利に働いたと想像したいところであるが、これについては裏付ける資料が見当たらない。第一次大戦を経て、ムージルは再び「ノイエ・ルントschau」に戻るのだが、報酬のことで折り合いがつかず、ムージルは不本意ながら同誌から離れることになる。後任はアルフレート・デープリンであった。

1914年当時「ノイエ・ルントschau」の編集者になって以降、ムージルは頻繁にザムエル・フィッシャー家を訪れるようになった。フィッシャーの妻ヘートヴィッヒが、ベルリンを代表する文学サロンを切り盛りしていたからである。ムージルがリルケと顔を合わせたのも、フィッシャー家でのことであった。

1919年以降、ベルリナー・ターゲブラット紙の専属フェユトニストに納まったケルは、ザムエル・フィッシャーとは長い付き合いがあり、1917年の『ドラマの中の世界』5巻、1920年『光の中の世界』2巻⁸⁾など、自らの著作をこのS. フィッシャー出版から出していた。そして、ローヴォルトが頭角をあらわしてきたのである。ローヴォルト個人の手腕に対してなど、ケルはローヴォルトを出版・ジャーナリスト業の強力なライバルとみなしていた。

さて、ケルの「拒絶される」に戻ろう。彼はその「短評」をこう締めくくる一かの四頭のブロンズの馬の美的価値、その芸術性の何たるかを解しない愚かなる馬商人、と。その文学的見識眼の高さについて世に聞こえていた出版社主エルンスト・ローヴォルト、そのローヴォルトを馬商人になぞらえたケルの言葉は、酷評ここに極まるともいうべきものである。またここで挙げられている「一味の殉教」とは、1919年のローザ・ルクセンブルクとカール・リーブクネヒトの「殉教」のほめかしであることなど⁹⁾、相手を刺し貫こうとするケルの筆勢、毒に等しいユーモアは相変わらずとも言えるが、ハース並びにローヴォルトの側としてはいわれのない最大級の誹謗を受けたことになる。

ケルは今回何ゆえに、これほどに厳しく、かつ激しい内容の文を書く気持ちになったのであろうか。ケルの「拒否された」が出るまでのほんの2ヶ月間程のうちに、ハースの三つの論文、そしてムージルのものが一つ、ローヴォルトの「手紙」が一通、ケルの抗議文が一つ、「リテラーリッシェ・ヴェルト」編集部の「メモ」が一つ、これらが大衆の目に触れる形で飛び交った結果として、ケルは今、1月30日にこの批評文「拒否された」を発表したのであった。

IV ハースが書いた三つの論説記事

IVの1 ハースの第2論文 ケルへの攻撃—女優の自殺未遂とケルの誕生日—

先ずは日付を40日ほど遡ることにしよう。ムージルの「ケル60回目の誕生日に寄せて」のエッセイが掲載された同じその新聞、すなわち1927年12月22日のリテラーリッシェ・ヴェルト紙に、ハースの論説記事「女優M.ケップケの自殺未遂並びにアルフレート・ケル60回目の誕生日への祝辞」¹⁰⁾が載った。

女優M.ケップケの自殺未遂

並びに

アルフレート・ケル60回目の誕生日への祝辞

この数日のうちに、ドイツの著名な演劇批評家アルフレート・ケルは60回目の誕生日を迎えることになる。彼のもとには、まちがいなく数え切れないほど多くの祝いの言葉が寄せられるであろうし、またそうなることも当然のことである。一因みにS.フィッシャーは先だってすでにこうしたものを編集し、本にして出版した。そしてまた、彼を信奉する無数のファンからのすてきなプレゼントも彼を喜ばせるに違いない。しかしながら最高のプレゼントということでは、すでに彼はこれを受け取っているのである。

すなわち：ドイツの最も優美で、最も魅力的な女優の一人マルガレーテ・ケップケ嬢が、一ルル役を演じた彼女について、厳しい見方をしているたった一つの批評のゆえに—ウィーンで自殺を図ったのである。役を演じ切ること、まさに崇高さの域にまで達しているというべきか。急いで付け加えておかなければならないが、この批評は決してケルから出たものではない。おそらくケルはこのケップケ嬢を一度も目にしたことはないであろうし、その名前すら耳にしたこともないであろう。この事件は、事実には照らして言うならば、そもそもケルとは何の関係もないのである。この点で私は、暴露すべきなんらの秘密も持ち合わせているわけではない。

しかしながら、である。ほんの数行の文でドイツの最も優美な女性の一人を絶望の淵に追いやり、死に駆り立てることのできる人たちのグループのひとりであるということ、これぞ誕生日にこそふさわしい感情、心の底から湧き起こる感慨というものであるにちがいない。大いなる尊敬の気持ちを抱きつつも、一言付け加えるに、私はこうした人々のグループの一員でなくてよかつたと、しみじみ感じている。

こうした書き出しで始まるハースの記事は紙面第1面の右側を占めて始まり、第2面の半分にわたるもので、新聞に載るものとしては長文の論説、あるいは論文と呼んで差し支えない長さのものである。

それにしてもまことに奇妙な、奇異なタイトルの記事がリテラーリッシュ・ヴェルト紙第1面に掲載されたものである。しかしながらこの「論文」のタイトルならびに内容は、慎重かつ周到に考え抜かれたものであった。死する日と誕生する日、絶望の淵への転落と希望の頂点への到達、優美な女性と権力を握った男、舞台女優と演劇批評家、無名と有名。読者には大変に分かりやすいテーマが、熱血漢振るうところの正義の筆で巧みに綴られている。興味深い「論文」の先を読むことにしよう。

この小さなケップケ嬢の像が私の眼前に浮かぶ。彼女とは何ら個人的な付き合いがあるわけではない。同じく、彼女が私の仕事に関連して、論ずるべき対象となったことも一度もない。こうした彼女の像の横に私は一人の演劇批評家の、あるいは文芸批評家の像を並べてみたい。かの自殺未遂の件について重い罪を背負っている男、その人物については私は名前すら知らないその男の像ではなく—いわば平均的な男の像、典型的なタイプを彼女の像のかたわらに置いてみたいと思う。[...] 私の目にはこれら二つの像が見える。いわば初見で、私にはこの上もなくはっきりと、そして像を目の当たりにしていることに付随する確実性をもって、ひとつ分かることがある。一因みに、いかに知性にあふれた異議といえども、この確実性を揺るがしえないことは明らかである。すなわち、ある世界の中、ある空気の中、そうした中では身体の貧弱さは身体の美に対して、身体の醜さは身体の優美の女神に対して、その美にふさわしい、その女神にふさわしい畏敬の念をものは抱くことができないのである。それ以上にそうした世界の中にあっては、すべての美の女

神から何らの好意も得ることのできない男、好意どころか、彼女たちからは呪詛しか与えられない男、こうした男が何と優美の女神の生死を決定するのである。このような世界、このような空気の中では、原則的なものが本来のあるべき位置に場を占めているとは言い難いのである。こうした私の主張について、私は声高に叫ぼうとは思わない。なぜなら私自身、演劇批評家ではないものの、映画批評家なのであり、従って私自身についても、話題の件は無関係とするわけにはいかないからである。

このくだりで、ハースは美の女神たち、例えば演劇女優、すなわちフォルクス・テアターのケップケ嬢と、醜く老いた演劇批評家とを並列させ、論じている。もっともハースの言うところによると、自分のここでの意見は一般論を展開しているのであって、したがってケップケ嬢の自殺未遂の原因を作った批評家について言っているのでもなく、いわんや、何らケル個人について言っているのではないのである。ハースの主張をもう少し聞いてみよう。

最近のことであるが、私はアルフレート・ケルの誕生日の祝いにふさわしいものを準備しようと考へて、彼の演劇批評集を手を取った。そして以前にも増して胸の高鳴りを覚えたのであった。私はずっとケルの批評を愛してきた。このことについては、全く嘘偽りはない。従って私は自分の中にある賛嘆の気持ちと愛を、この「リテラーリッシュェ・ヴェルト」に是非とも発表しようと考へた。そのときである、ケップケ嬢の自殺未遂が割り込んできた。突然、なにかかもが変わってしまったかのようなだった。裏の面、夜の面が見えたのだった。きらびやかで、一切を無に帰せしめずにはおかないすべてのウィットの影に、私は犠牲者を見た。苦しみを強いられている人、絶望の淵に追いやられている人、病んでいる人、そうした人々の大勢が突然に姿を現したのである—ケルの全集がドイツの批評の輝かしい記念碑となることの見返りとして。そして、つまるところは一人の著名な人物の名声を「作り上げる」役目を担わされるだけの愚かなる平均的読者たちが、エレガントに催される眼前の屠殺行為を見学することで、その小市民的でサディスティックな喜びの感情を充足させることの見返りとして。

ハースの論の調子は執拗であり、糾弾ぶりは非常に厳しい。彼の文体の特徴は、映像の喚起を意図しており、それゆえに部分部分の説明は大変に強い印象を与える。先の引用部分で「そもそもケルとは何の関係も無いこと」と断っておきながら、このくだりに来て「ケルの演劇批評集…」とこられては、ハースの文章の調子も手伝って、ケルの側からして自分が槍玉に挙げられていると感じ、怒りも込み上げてこようというものである。

ここで取り上げられているケップケ嬢の自殺未遂事件に触れておこう。

1927年12月3日土曜日、ウィーンのドイツ・フォルクス・テアターでヴェーデキントの『地霊』が初演された。翌4日の日曜日、さらに8日木曜日等々の再演とその先のスケジュールも決まっていた。ケップケ嬢、すなわちマルガレーテ・ケップケが主演のルルを演じた。

初演の翌々日、12月5日月曜日の朝、ウィーンの週刊新聞「デア・モルゲン」にアルフレート・ポルガーの劇評が出た。比較的長いこの劇評の最後のくだりでポルガーはケップケ嬢について以下のように書いた。

しかしそれにつけても残念なのは、ケップケ嬢である。この上もなく繊細で魅力にあふれ、そしてきらめきを放つ才能の持ち主は彼女に与えられてもない課題に一所懸命になっている。彼女のルルは真空の中に立っている。その場所で情熱が荒れ狂い、悲劇の火が燃え上がるとは、どう

眞面目に見ても、到底無理な話である。そのおどけた仕草には感心させられるばかりであり、その立ち振る舞い、そして四肢が描き出すアラベスクの奇妙な優美さに対しては、かの人形作りブリッツェル女史の最高の人形もただただ恥じ入らざるをえないに違いない。

ケップケ嬢はルルを演じてはいない。彼女が演じたのはルルのかわいい妹である。ルルがこの妹の物まねをしようとしたにすぎない。悪をなすことについては、能なしの女。

ウィーンを代表する演劇批評家ボルガーは、ルルを演じたマルガレーテ・ケップケについて以上のように評した¹³⁾。人形よりずっとすぐれた女優、と。

ケップケ嬢の魅力を言うために、ここで比較の対象に選ばれている人形はかのライナー・マリア・リルケが一文を捧げたことでも知られる当代切っの蠟人形作りロッテ・ブリッツェル女史の手になる人形。そのエッセイで、リルケは「生まれて初めての愛情を、愛する甲斐のない相手に捧げるようにあらかじめ定められている我々人間は、何と奇跡的な被造物」¹⁴⁾であろうとため息混じりに告白する。そして「人形の魂」の秘密を説き明かす一人形に愛をもって接する人間たちに、人形の側は沈黙をもって、そして鈍重さをもってのみ応えるのである、神にしても然り、と。

さて、こうしてボルガーはケップケ嬢を酷評したのであった。

12月9日金曜日、ウィーンの高級紙「ノイエ・フライエ・プレッセ」夕刊第3面に大見出しが載った。「女優マルガレーテ・ケップケが不可解な病氣―自殺未遂あるいはガス中毒?」。記事は、フォルクス・テアターの著名な女優マルガレーテ・ケップケが昨日午後自宅において、ガス中毒の兆候を示して意識不明になっているところを発見され、療養所へ運ばれねばならなかった…、と報じている¹⁵⁾。翌12月10日土曜日の同紙朝刊第7面は彼女のその後の病状、自殺を図った原因、自殺の発見に至るまでの経緯などを詳しく書いている¹⁶⁾。自殺の原因については、ルルを演じた彼女の演技について、評価が「二つに分かれた」ことによって、「芸術家の名誉心が傷つけられた」せいではないか、とあり、批評が原因であることを言外に言っているが、ボルガーの批評については言及していない。

短い文章形式を用いて的確な批評を書くことで、最大限の評価と人気を博していたアルフレート・ボルガーは、その著作をローヴォルト出版から出していたが、その一方で、ケルが毎度その健筆を振るベルリナー・ターゲブラット紙にも頻繁に寄稿しており、ケルとボルガーは、仲間同士とは言えぬまでも、同じ世界の住人であった。特に、短い文章形式で的確な批評を書くというスタイルについては、共通の読者から熱い支持を受けていた¹⁷⁾。

ハースの論文に戻ろう。ハースは、論文のこのくだけで批評家の暴力的な力を告発しているのであるが、この段落のハースの主張でとりわけ注目すべきは、「つまるところは一人の著名な人物の名声を『作り上げる』役目を担わされるだけの愚かなる平均的読者たち」という副文である。ハースはここでケルの虚名について、人為的な操作で形成され、維持されているケルの名声のからくりと言及し、暴露している、しようとしているのである。自らの評判について自ら演出し、そ知らぬ振りで自身への高い評価を受け取るケル、ハースはこの点を指摘している。ハースの言葉は正しい。反論は不可能であろう。

このことについては、若きミュージルにも思い当たっていた。ケルみずからが『テルレス』に加筆修正の手を入れたにもかかわらず、ケルはそ知らぬ振りで『テルレス』を、そしてミュージルを絶賛した。ミュージルは、いつかの時点で「果たしてケルはこの自分に何を見て、何を認めて誉めてくれたのか? 彼はこの自分の何も見ず、この自分の何についても認めていなかったの

ではないか？」と自問したに違いない。しかし、ムージルはこうした考えを一切表に出さなかった。表に出すことなく、内に向けて問題として深めていった。自分とケル、自分にとってのケル、ケルとは何か…。

ここでのハースはたたみかける。…こうした種類の嗜虐趣味を満足させるには、牛をいたぶり、そして屠るスポーツ、すなわち闘牛の見世物のほうが遥かに人間的であり、享受するに望ましい、従ってドイツでも闘牛を導入、奨励し、その代わりに、残虐なことこの上もない「演劇批評」を廃すべきであると彼は提案する。

30年間、いや35年間の批評！湧き出るエスプリの数々、内的な集中の数々、出版人として、そして詩人としての最高にして最大の才能、その粘り強い意志、その活発な気性、剣の一突きに込めるエネルギー、30年間、いや35年間、これらが日々研ぎ澄まされ、そして日々実現されてきたのである—そしてその結果は？劇場はこの30年間の中で、ドイツ精神文化の主導的地位を失ったのである。

ケルが文筆家として、演劇批評家として出発した時期は何時であろうか？ケルの最初の演劇批評は1893年8月19日、「マガツィーン・フュア・リテラトゥーア」誌に載った。こうした演劇批評に続く大きな仕事ということでは、その後5年間にわたってプレスラウ新聞に送りつけた「ベルリン便り」を第一に挙げるべきであろう。「ベルリン便り」の執筆は1895年に開始された。

今1928年1月、1893年から数えて35年目、1895年から数えて33年目、ハースはケルのこれまでを正確に回顧し、そしてドイツの現代文化史を総括し、ここに劇場の危機、劇場の没落を告知している。ハースは続ける、ケルは「批評家のスター」の一人になることができた、しかしながら、現代文化の主流、大衆文化の流れ、レビュー、民衆劇、そして映画、そうしたものにケルの演劇批評は何らの寄与も果たすものではなかった、それゆえにすべての新聞が抱えているこれら「スター」すなわち「この人種は、どんなに当世風に振舞おうとも、やがては死に絶えるにちがいない」とハースは断言するのである。

ケルは映画について全く筆をとらなかったかということ、そうではない。しかし演劇への関心の強さに比べると、映画へのそれは薄かった。新興の文化・芸能についても同じである。その点について、ハースはここで言及しているのである。ケルと映画との関わり、その他について論じることは別の機会に譲るとして、ハースがここで指摘している「劇場の没落」と「今日、すべての大新聞が演劇批評のスターを抱えている」との二点については、立ち止まらざるをえない。

ハースの議論はジャーナリストのそれである。没落する気配を察し、そしてこれを指摘する。ジャーナリストの真骨頂は早さであり、速さである。機を察知する能力、そして俊敏さ。

すべてが急激に変化する時代であった、ということが出来るのかもしれない。

フランスに映画が生まれ、無声映画からトーキーへ、白黒からカラーへ、19世紀末から20世紀へ、そして今21世紀へ、映画の歴史を考えると、たしかにケルの生きた時代は映画については、「ただ一度だけ」の特別な時代であった。見え方、目の錯覚への関心、そして映画技術の発明。そしてその改良と発展が遂げられることにより、大衆文化の担い手としての決定的なメディアが誕生・成立した時代であった。

誰もがこの芸術形式に関心を寄せた。映画の不思議さと面白さの体験と、知覚機能の仕組み

の科学的解明とは一対であった—誰もが、とはミュージルも一時期、こうした分野の研究者を志している。ハースの幼友達カフカも目の錯覚について、いつも特別の関心を払っていた。そして、ともどもに映画を好んだ¹⁰。そしてハースは、時流を逃さず自らを映画批評家と名乗るのであった。

その意味でこの時代、「劇場の没落」は素朴に事実であった。劇場の俳優は「ファウスト」の12111行の詩文をそらんじることができた、という。自分の役柄の長台詞を覚えていることなどは、基本のそのまた基本であった。ここに、無声映画がやってきた。俳優たちは大きく目をむいて、白目を見せたり、ぎょろ目を見せたりしてその「芸」を磨き、披露した。皺だらけの「少女」に出番は無い。ベルリンのドイツ劇場、レッシング劇場、ウィーンのプロク劇場、フォルクス・テアター、どこでもいいのだが、今宵一晚限りの「光の中の世界」をはかなく生きる「芸」に取って代わって、映画芸術は自らを全ヨーロッパに、アメリカに、全世界に押し通す。ハースはこうした流れに乗り、この事実を大声で告げ知らせた。一夜の、刹那の、せいぜいのところ1000人の単位を相手にした興行の形式、これは滅びる、と。これについてもハースの言葉は正しい。反論は不可能であるように思われる。ハースは時代の流れ、時代の現実、時代の経済を見、これを盾に、礎に、バックボーンにして自説を展開している。

しかしこの時代、新聞はいまだ最大の国民メディアであった。ラジオはあった。が、各都市に一局だけのラジオ放送、官製ラジオ局であった。

各新聞そして各雑誌の競走、その生存競争は激しかった。新構想、生き残りのための企画、そして清新で、何よりも人目を引き、他を圧する内容、倒すか倒されるか。演劇批評のスターも必要であった。その価値、重要性は、ハースに言わせると年毎に下落し、やがて死に絶えるとしても、現在はいまだ多くの「スター」が存在する。後代に名をとどめるような新人の発掘もこうした批評家の重要な役目であったが、日々のスキャンダル、有名人のゴシップ、アバンチュールの暴露、あら捜し、あげあし取り、失敗談、こうした記事も各紙、欠かせないものであり、それ故に「スター」も劇評の他にいろいろなものを書いた。スターであるからこそ…。

さて、劇場の没落、演劇批評家の横暴ぶりを指摘したハースは、最後にケルの文章スタイルの分析へと論を展開する。これまた、非常に興味深い分析であり、優れた見解といえる。

そして今やここでこそ—私は思うのであるが—、本来的な歴史的弁証法が働いて、ケルの本質へとたどりついたのである。彼がこれまで批判してきた大半の詩人よりも自分の方がすぐれた詩人であるとの意識から、そして対象としているほとんどすべての連中の頭脳よりも自分の方が優秀であるとの—なるほど十二分に理由のある—感情から、彼はみずからの批評を尊大かつ軽蔑を込めた調子で書いたのである。この現象こそが我々を魅惑し、この心理学的計算こそはまことに口惜しい事ながら、正しすぎるほどに正しいということ—これこそが、演劇批評家の今日的なステータス形成のための歴史的な主要動機なのであった。彼は立脚点全体を「高めた」のであった。彼はその立脚点を、本来的にそれが位置し得ない地点にまで高めた。彼に続く若い世代は、すべての事柄について彼と激しくわたり合った。しかしながら、彼が彼らのために築いた地位、彼が他の誰よりも熱心に築き上げた地位—これについて彼らが関わらなかったことについては、あるいは当然のことであったと考えることもできるのである。

ケルの文体の秘密についての解説と、ケルを筆頭とする演劇批評家全体の否定を内容とするこの論考は、ケップケ嬢なる舞台女優の衰れた事件を耳にした者としては、どうあっても大声を

出して言わざるをえないことなのである、それが道化の義憤であっても、とハースは言いたいのであろう。

ハースの言葉は正しい。またしても反論は不可能であるように思われる。

演劇批評家の度外れた権力、ペンの力、ペンが支えるマスコミの力、そのスター権力を笠に着ての非常な横暴ぶりにハースの堪忍袋の緒が切れた。そして、王、独裁者、法王をもしのぐ権力者としてのアルフレート・ケルのイメージが、このハースの文で出来上がったのであった。版画家カール・レッシングもすぐさまその木版画で、法王の杖を握るヒットラーに似せてケルを描いた。この作品は、今なおレッシングの代表作の一つとして知られている¹⁷⁾。

IVの2 ハースの第3論文—ケル、不快感を示す手紙を送り、ハースは応答する

ハースのこの論説に、当然のことながらケルは非常な不快を感じた。非常な不快を感じたケルは、リテラーリッシュェ・ヴェルト紙に宛てて文を書き送った。ハースは、ケルから送られてきたこの文書とこれに対する彼の回答文とを一緒にして、年が明けた1928年1月13日のリテラーリッシュェ・ヴェルト紙に掲載した。ハースの第3論文ということになる。

我々の演劇批評がその終末を迎えるに当たっての出来事¹⁸⁾

ベルリン「リテラーリッシュェ・ヴェルト」編集局 御中

I

一筆したためます。できることなら黙っていたいところですが、真実は明らかにされねばなりません。ほんの数行で片付きます。

放っておいても自動的にやって来る記念日のことで、ヴィリー・ハースが私を賞賛する記事を書き、これを「ノイエ・レントシャウ」に掲載させたと聞き及んだとき、私は言った「わがハースには考えがあつての今回の措置。彼はこれで、『リテラーリッシュェ・ヴェルト』においては私を賞賛する必要がなくなった、ということである。というも、彼は、これを禁止されているからである」。私は正しかった。

しかしながら、ウィーンの美しく、かわいい女優の自殺未遂が、否定のために、一私の職業の否定ではなく（というのも、私の職業はそこで言われているようなものではないので）一職業としての批評全体の否定のために役立つとは、私といえども想像だにできなかった。（批評家ケル、批評家X、批評家Y—こう分散されている。こうした書き方で、私に対する矛先は和らげられ、途中で中断している）

II

私は自問する「私は精神病なのか？」人生をかけた私の仕事の中核とは、私の書きものによって人々に苦しみが生じた、ということなのか？幸せ、ではなく？

こう書いていても腹立たしいのだが、実績のある者、可能性を秘めた者、皆が皆、私の書いたもので昇天していった、というのだろうか？—イエスカノーか？（読者の幸福については問わない）そもそもが、私の地上的な営みのうちのほんのわずかな一片について、今現在言及され、…話題の中心となっているのか—イエスカノーか？私は精神病なのか？あるいは、ハースが精神病なのか？

III

残念ながら彼は健康である…逆であるならばこう言いたかったのだが—Absolvo te 汝を放免する、と。

アルフレート・ケル

ハースはケップケ嬢の自殺未遂を哀れむ文と、ケルの60歳の誕生日を祝う文とを一つにして書いた。ケルはこの文を読み、不快を感じ、すぐにハースにこの手紙を書き送った。ケルがこの手紙で主張していることは、ハースの書いた「女優M.ケップケの自殺未遂並びにアルフレート・ケル60回目の誕生日への祝辞」には、色々な状況がハースに対して作用し、その結果としてこれが生み出されてきた、と自分は確信している、ということである。ハースはこのケルの手紙の全文を冒頭に配置し、そしてこれに応じる所見を書いたのであった。これも一面から二面にわたる大きな論説である。ハースはケルの手紙に応じて、こう始める。

これがすべてである。「リテラーリッシュ・ヴェルト」51/52号の、今日におけるベルリンの演劇批評の存続不可能性を書いた巻頭記事について、関係する方々からあった発言は以上紹介したものがすべてである。編集室のファイルは、数え切れない応援と感謝の便りではちぎれており、いまだはっきりなしにこうした郵便が届けられてくる。問題の当事者であるお歴々には、この件は何ら急を要する問題ではなく、なんら議論する価値を有していない。アウトサイダーの一撃、これを払いのけることすらしない。

三週間前にあれだけ見事な論説を書いたハースである。多くの読者からハースを支持し、賞賛する便りが寄せられたと言うのは、その通りであろう。この事実を背に、ハースには余裕のポーズすら感じられる。続く段落でハースは「自分が主張したことは…」と読者に対し、先の号で自分が展開した論旨をあらためて詳しく紹介する。演劇批評がこの四半世紀において犯してきた罪、そしてその未来についての不可能性、である。

以上のことを私は言ったのである。どうやら私は決して威張るつもりはないのだが一しかしながら、どうやらこの件については判決言い渡しの時が来ているようだ。袋一杯の投書の山を見ている限り、私はそう確信する。

しかしながら当の演劇批評家諸氏には、この件はさしあたって論じる価値がないのである。ただ一人だけが反応した。アルフレート・ケルである。そして彼は何を言わねばならないのか？

「俺は侮辱された。俺は傷ついた。お前は一切をご都合主義から、その抜け目の無さから発言しているだけだ。お前は俺を攻撃する義務を負っていたのだ。そして、難なくうまい方法を考えついた。他の演劇批評家と一緒に俺を攻撃するというやり方だ。俺は殺してばかりではなかった。俺はその一方で、こちらの数の方が勝っているのだが、瀕死の人間を蘇らせることもした。お前の頭は完全にいかれている…いや、残念だがお前の頭はいかれていない、お前は分裂している、分裂したジャーナリスト」と。

これが、正確にこれが、この件について言われたことである。

演劇批評に対して、演劇批評家に対して、ケルに対して、あえて名指しこそ避けたもののポルガーに対してあれだけのことを言い放ったハースである。そして、ハースの言うことに圧倒的に分があった。ハースはケップケ嬢に同情を寄せ、権力を笠に着た醜い老批評家たちを懲らしめているのである。そうした老批評家の中でひとり名指しされたのがケルであるから、ケルとしては黙っているわけにはいかなかった。しかし、勢いを得ているハースにしてみれば思う壺というところである。我々二人、すなわちハースとケルは、二人して仮面を外し、真正面から渡り合うことにしましょう—こうハースは挑みかかり、この論文の中核が展開される。

ケルの考えはこうである—ハースは禁じられている、理由はローヴォルトが、それを望まないから。ローヴォルトは「リテラーリッシュ・ヴェルト」の前のオーナーであり、今でもこの新聞に資本参加している。その一方で、ローヴォルトはまた若手劇文学の出版人でもあるのだが、批評家ケルはこの文学をこの上も無く厳しく拒絶している。ローヴォルトと、そして彼に依存している輩と、すなわち度々に渡りケルに酷評された例の若い劇作家と、さらにはこれらの作家を誉めそやす批評家たち、そして彼らに肩入れするファンや友人たち、こうした連中が「リテラーリッシュ・ヴェルト」の編集部の空気を支配している、これが圧倒的であるために、その結果としてハースにはどうしてもできること、できないことが生じる。その結果として、彼は…書き出しに戻られたし！

尊敬するケル博士、あなた様のお考えの内容把握はこれで正しいでしょうか？

さ—て、それで。私たちは仮面を脱いだ。私は元々は法律家、そうした立場から言うならば、この状況証拠にはいまだ不備があるので。

私、すなわち編集責任者は、「リテラーリッシュ・ヴェルト」の第一面でケルを手放しで賞賛することを禁じられていました—しかしながら、皆に認められている私の協力者ローベルト・ムージル、この同じ号の新聞の第三面で、彼は心置きなくこれをするを許されたのです。

つまりは、編集人にのみ許されなかったということなのでしょうかね？なぜ、よりによって編集人に許されないのでしょうか？結果としては同じことなのですが。その人物、まさしくその人物に対してのみ許されなかったという点、この点はどうあっても無意味ではあるわけですが、しかし—この申し立てそのものは、記録簿に記載されることになります。

さて、検察官ケル殿は被告ハースの、以下の再抗弁にどうお答えになるのでしょうか。すなわち：「昨日許されたことが—なぜ、今日ばかりは許されないのでしょうか？私はほんの数週間前、リテラーリッシュ・ヴェルト紙に載せた相当量の論文において、ロシア映画に関するケルの最新刊を論評しました—そしてその機会に、エッセイストとしてのケルに感激し、そして絶賛しました。検察官ケル殿はこの事実をどのように説明なさるのでしょうか？」

ハースの追求は厳しい。理屈はハースにあり、これに反論することは難しいように思われる。ハースには余裕が感じられる。ハースはさらにたたみ掛ける。

この私がパンツを盗んだ、と誰かが同じように主張するでしょう。その場合に出てくる当てこすりの類いが、仮にケルによって書かれたものでなければ、私は別種の回答ができようというものである。ジャーナリストたるもの、そもそもそうした程度の嫌疑の言は甘受することが当然のことであるとのケルの判断に基づいて、ケルは、私が彼に抱いている尊敬の程度を計ろうとしている。その尊敬たるや、非常に大きいものであらねばならない。

俺を尊敬していると言うならば、このぐらゐのことは黙って辛抱しろ。俺がお前は黒だと言ったら、間違っても「自分は白です」などとは言うな、事実はどうでもいい。せいぜいのところ口をつぐんでいるんだぞ！—ケルの態度は、このようなものである、断じて許せない、とハースは告発している。理屈はハースにあり、反論は難しいように思われる。

このあとの段落は、ハースの論文の結びである。ハースは「ケルに対して感謝する」と始める。他のジャーナリストが黙っているとき、ケルひとり声をあげてその正体を見せてくれたから、と。ハースは、自分がベルリン文学界の大御所の全員を相手に一人孤独に闘いを挑んでいる、何人かの人が自分の声に耳を傾けてくれているから、と自分の立場を訴えかけ、こう結んでいる。

長谷川 淳 基

以上は、かつて素晴らしい精神の制度機関であったもの、これが崩壊するシーンである。以上は、我々の演劇批評がその終末を迎えるに当たって行われた論争である。

ヴィリー・ハース

そして、それにかかわらず：隣接テーマに関する第三の記事が続く。

ハースの勝利である。しかしケルは引き下がるわけにはいかない。ハースの方は窮地のケルをさらに駆り立てる態勢をとっている。ケルのピンチである。ケルはペン先を尖らせながら、窮地を脱するための策を練った。手がかりになるもの、きっかけを探した。そして見つかった。ムージルである。一週間後のことであった。先に言及した1928年1月20日付リテラーリッシュ・ヴェルト紙の例の小さな記事がそれである。

編集メモ：ローベルト・ムージルの筆による「ケル60回目の誕生日に寄せて」の論文は一このタイトルで我々のクリスマス号に掲載されているのであるが一印刷の際に手違いがありこの論文の最後は、残念ながら一字一句まで正確に印刷することができなかった […]

この「編集メモ」は使える…、とケルは思った。そこヘローヴォルトによる、ケルを「拒絶する」という手紙である。自家の新聞ベルリナー・ターゲブラット紙でケルは反撃のペンを振った。10日後、1月30日付同紙のケルのエッセイ「拒絶される」がそれである。

ケルについて書いたハースの論説「女優M. ケップケの自殺未遂並びに […]」について、ケルが一人ハースを相手にしていれば、問題はさほどに大きくはならなかったであろう。ケルはハースを直接の相手だとは考えなかった。向こうを牛耳っているのはローヴォルトである、ケルはそうした考えを公にした。ハースも、飛んで火にいる…、とばかりにこれに応じた。

ケルがこのような思いを抱くに至った理由は、ケルとハース双方が言及しているように、ハースが、ケル60歳の誕生日を機に書いた二つの論文の落差にあった。その一方が「女優M. ケップケの自殺未遂並びにアルフレート・ケル60回目の誕生日への祝辞」であり、もう一つがS. フィッシャーの看板雑誌「ノイエ・ルントschau」にのった「批評家ケル」である。順序が後先になったが、「ノイエ・ルントschau」を開いて、このハースの論文を、すなわち本論で名付けるところの「第1論文」を読んでみよう。

IVの3 ハースの第1論文—ケルの偉業について書く

批評家ケル

ヴィリー・ハース著

Je donne toute la Suisse pour une salle du Vatican. C'est là qu'on rêve. (ヴァチカンの広間ひとつのためならば、スイス全土ですら何ほどのものであろう。これぞ我が夢見たもの)。ある機会にケルは、このフロベールの言葉を引用している—フロベールに挑みかかるために。ケルはこの文をただ一度だけ引用している。しかしながらケルはフロベールに間断なく挑みかかってきた。彼の批評態度の本質的な部分は、水面下で途切れることなく続くこの議論の上に成り立っている。すなわち、人生は芸術以上のものであり、人生体験は芸術体験よりも重要である、とケルは言うのである。ジュネーブ湖のほとりで、あるいはテネリフェ島で、あるいはブロードウェイの一角で、あるいは若い娘の腕の中で見る夢は、芸術作品を前にして見る夢よりもすばらしいのである—たとえこの芸術作品が、ケル自身熱狂的に愛して止まないゲルハルト・ハウプトマン

のドラマであっても、である。

私らがこのジレンマを感じるならば、すぐにでもケルの判断が正しいと言いたいところである。が、これは一種の歴史的なジレンマであり、昨日の絶対的かつ最後のアンチテーゼのひとつであった。そして、今日の時代はこれがまさに相対的で、その時代にのみ限定された副次的なものでしかなかったとの理解を持っている。

ケルを論じたハースのこの文章「批評家ケル」¹⁹⁾も、やはりケルが60回目の誕生日を迎えるに際して書かれたものであった。一読して、ハースが長年にわたりケルを注意深く読んでいたことがよく分かる。

文章全体は6ページあり、上の引用は書き出しの部分である。バチカン宮のただ一室をもって、それだけですでにスイス全土の美観の総計を凌駕するとのフロベールの言葉を引いて、これに真っ向から反論するエッセイを、ケルは1908年の夏に書いた²⁰⁾。このときケルは夏の長い休暇旅行先であって、その年の演劇シーズンを回顧し、これを下に見るように、夏のキリギリスが冬の手をあざ笑うように論じる。芸術も文学も演劇も、この晴朗な夏の人生体験に比べると何ほどのものでもない、そうケルは書く。

芸術にたいする人生の優位、その優位に立脚してみずからの論を構築するケルの論法・考え方は、すでに古びた議論であるとの主張で、ハースはこの論を開始する。ケルの議論の古さ、ケルの内に存在する矛盾をハースは並べていく。

劇作家に対して、演劇批評家であるみずからの優位性を確信し、その確信で押し通してきたケルの最も特徴的な主張「一体全体、人々はいやになるほどの悩みを持っていないとでも言うのだろうか？人々はこれ以上さらに、他人の悩みをじっくり眺めなければならない必要があるとでも言うのだろうか？人生は十分な喜びと哀しみをもたらしていないとでも言うのだろうか？一体何のために？」を引用して、ハースは首を横に振ってつぶやくのである—このように演劇について吐き捨てるように言うケルであるが、「そうは言いつつも、その人生の四分の三を一階平土間の正面に陣取り、ドラマと俳優についてもを書いて過ごしてきた」のは、当のあなた自身ではないか…。

そして「少々長ったらしい不平のリスト」とハースみずから自分のこの論考を評したのちに、ハースはアルフレート・ケルについての分析の核心に入っていく。

ハースはケルという人物の特徴として、ジャーナリズム性、診断能力、行動主義の三点を挙げる。これらケルの三つの特徴的性格は、いずれもそれぞれに首尾一貫性を欠いており、それ故にこそ逆に強固で見事な一貫性が認められることを言いたい、とハースは最初に論の全体を予告する。

その一、ケルのジャーナリズム性。

その時代が、すなわち1900年から1914年の時代がどのような意味合いを持った過渡期であったか、ケルほど正確に感知していた人はいない。多くの人たちは時代の潮流に身を任せて泳いだ。これらのうちの一方は最上部、水面で。ここでは水の流れて乗って、移ろい変化していく岸辺の風景が知覚されるばかりである。すなわち、印象主義。

もう一方は下の非常に深いところ、深淵。そこではおぼろげな丘と静かで牧歌的な大地の起伏、そして人の世を遠く離れた夜の洞穴、魔法の光に包まれた窪みが広がっている。そして繁茂する充溢とグロテスクな生が、動物相と植物相について見極めがたい場所を漂い続ける。そこにいる

と、固い大地を足裏に感じるのであるが、何時とは知れぬ間に、何らの気配すらも感じさせない流れに運ばれていくのである。そこには絶対芸術の共謀者たちが棲み、ここには流れはないのだと、日々お互い同士言い交わしているのである。

潮流の表面、水面を泳ぐ印象主義者たち、そして深い淵に棲む絶対芸術の信奉者たち、そしてケルは？ケルは潮の中間層を浮遊する「水中のジャーナリスト」である。ここからは上方の暖かい光を感じることができ、上の世界のきらめく微光を目にすることができる。そしてここからは、深淵のたそがれと闇を窺うこともできるのである。この中間層を漂うが故に、ケルは自分だけの秘密の泳ぎ方ができる、とハースは説明する。

その二、ケルの診断能力。

しかしこの奇妙な水中動物は、その体の構造も非常に変わっている。身体の主要部位、すなわち呼吸器官、口、消化器官は流れに乗って泳ぐ。しかしながら彼には触手があり、しかもこの触手は捕縛器官を持っている。この触手は手探りしながら、何キロも先にまで伸びて行き、障害となるもの、岩礁、浅瀬、渦巻きを感知し、そして食べ物を手に入れてくる。未来の原素材がこのようにして身体に供給されるのであるが、その身体は現在の身体である。未来が、いわば身体化した現在を通じて消化されるのである。1910年が1927年を消化するのである。決して単純ではないメタ生理学的なプロセス。

ハースは言う、1910年の、1912年のケルを読んでみると、そこには1927年がある、1927年が1912年の時代精神に呑み込まれている、そしてケルの予見能力、その先見性は彼の頭の部位から出てきたものではなく、彼の全身、彼の全生命から生み出されたものに他ならない、と。

その三、ケルの行動主義。

ケルは現実のものとなった未来について、その一部を創造したのであった。そのために彼は考え、そして発言した。これは錯覚なのかもしれない。つまり彼は考えなどしなかった、「何か」彼の中で考えたということである。未来が彼に思考を与え、同様に未来が彼に、未来の望むものを与えた—そのように彼は未来について考え、そして未来を望んだ—そして未来はやって来た。[…]

ハースは言う、ケルは先の時代を見通していたのだが、その見通した時代を彼は先頭に立って動かしてもきた、そして彼の動きつづける身体、と。

ハースはこの論究を、ケルの議論の古さ、ケルの中にある様々な矛盾を列挙することで始めた。これはケルをその静止状態で測ろうとしたことに他ならず、そんなことをするものだから滑稽な矛盾ばかりが認識されるのであった、とハースは振り返って説明する。ケルのどの時代を測定してみても、その時々ケルには同じ音が共鳴しており、ケルのどの時代もフラッシュのシンクロ接点を持っている、スイッチを入れると、そこに、そしてここに紛れもない真の個性アルフレート・ケルが姿を現す、そこにはただ見事な一貫性があるばかり、と。そして彼は締めくくる。

今このとき、この60歳を迎える男の批評を初めて読んだ時間のことを思わない人間が、果たして存在するであろうか？読者よ、あの時間を思い出すがよい。このことこそが他の何にも増して重要なのである。彼の全作品こそは彼の大きい唯一の伝記である。ただ無心に過去の自分自身を

思い起こしてみること、彼に近づく道、彼を理解する術としてはこれに勝る方法はない。

以上がハースのいわば「ケル論第1論文」の内容である。いささかもって回った論旨ながら、最後はケルを絶賛している。巧みな文章である。

先に言及したムージルのケル論とハースのケル論の、結論部の相似は明らかである。ハースはケルに対してややもすると敵対的なポーズを取りながら論を展開しているのに対し、ムージルはケルとの間に、冷静に距離を保ちつつも批判めいた意見を述べている個所はない。二人の論説はケルに対する二人の位置関係を正確に表しており、二つながら、批評家ケルに関しての信頼に足る評定とみなすことができる。

そして、時を措かず発表されたハースのいわば「ケル論第2論文」に当たるものが上に見た「女優M.ケップケの自殺未遂並びにアルフレート・ケル60回目の誕生日への祝辞」であった。フィッシャーの雑誌では誉められたのに、ローヴォルトの息のかかった新聞ではこき下ろされたケルはこの二つの論の落差に何かを感じた、意図を、影響力を、ローヴォルトの影を。

そしてケルの抗議の書簡、これに対するハースの応答—すなわちハースの第3論文の発表、1月13日。続いて1月20日の「編集メモ」、1月27日のローヴォルトの「手紙」。ケルの側からの本格的な応戦開始、すなわち1月30日付けベルリナー・ターゲブラットでの記事「拒絶される」の発表。さらに一週間後の2月6日、ケルはもう一度同紙夕刊にこの件に関し彼の意見を「補遺」²⁰⁾として繰り返した。

この「補遺」の内容であるが、ケルの「拒絶される」に対しローヴォルト出版が書いた4項目からなる短い文について、それぞれの項目にケルがコメントしたものである。1) ローヴォルト出版の経済状態、2) 作家からの資金援助、3) ローヴォルト出版に関係する作家たち、その二派のグループのこと、4) ローヴォルトと「リテラーリッシュェ・ヴェルト」との関係、これら4点をめぐる双方の考え方について、主にその相違について、ケルはこの「補遺」で報告した。この「補遺」の最後でケルは、ローヴォルトがハースを「咎めた」という表現に言及し、さらに「因みに、ローベルト・ムージルが、彼はローヴォルト出版の作家であるが、この件について発言することについては、耳を傾ける価値があると思われる」との文で締めくくっている。

ケルはムージルを頼みにした。ムージルが、今回持ち上がっている騒動に関し、ケルに有利に作用する発言、証言をすること、すなわちローヴォルト側には不利に働く発言がなされること、このことをケルがムージルに期待していたことが、このケルの最後の文から推測できる。ケルは望みを抱いていた。

V 論戦終局のエスカレート、そしてムージルの仲裁

Vの1 ハースの第4論文—全面攻撃

ケルの側からの二つの反撃—「拒絶される」、「補遺」—、ハースはこれに応戦する。リテラーリッシュェ・ヴェルト紙上、2月10日、そのエッセイ「アルフレート・ケルの攻撃」²¹⁾ すなわちハースの第4論文、これは真に凄まじい文章である。ハースによる、ケル糾弾のクライマックスをなす文である。

アルフレート・ケルの攻撃

アルフレート・ケル。こうした形で事態が進展していくことについて、我々は決して望ましいこ

とではないと考えます。私はチェスをたしなみますが、敵を攻めることが得手ではありません。攻め方というものに興味を湧いてこないのです。あなたはというと、これを大変に得意としておいでになる。しかしながら、チェスは二人ですもの。失礼の段、重々に承知の上で申し上げますが、このゲームのお相手をお断りします。ゲームはこれにて終了ということになります。ただもう少々、事実関係について申し上げたいと思います。

あなたは、アルフレート・ケルよ、何週間か前に公開の書状という形で私に向かって以下のよう主張なされた。すなわち、「リテラーリッシュェ・ヴェルト」紙上においては、私はあなたに関する自分自身の意見を自由に言うことが許されていない、と。私が「リテラーリッシュェ・ヴェルト」紙ではなく、フィッシャー社の「ノイエ・ルトン・シャウ」誌にあなたに関する賞賛の記事を書き、それに対して「リテラーリッシュェ・ヴェルト」紙では、ある種の文化社会学的な弊害、これに関してはあなたの意志が作用してくだんの事態が発生した、ということではないわけですが、そうした弊害を指摘したという事実。—この漠とした事実だけであなたは、私が出版人としての独立性を欠いていると私を非難なさるわけです。この非難の趣旨は、あなたご自身が良くご存知のように、我々の業界では名誉の毀損に該当するものです。

アルフレート・ケルの「攻撃」に対するハースのこの反論の書き出しは、感情を抑えた冷静かつ淡白な文章である。自分はこれ以上の論争をするつもりはない、もしもこの先をお望みならば、あなたお一人どうぞ、と始まるこの部分を読む読者としては、どうやらハース側からの幕引きのための文書であるらしい、との印象を持つにちがいない。一方的な幕引きの文だから、自分の主張ばかりではなく相手の主張、言い分についての譲歩や妥協も含む内容であろうし、双方の折り合いをつけようとする意図が働いた記事に違いない、新聞の読み手としてはこのように想像が働くところである。しかしながらこのハースの文は、そうした風に想像されるものとは程遠いものである。ハースはチェスについても名手であったかもしれない。ハース自身は自らのチェスの腕前について謙遜した風書いているが、論を展開するハースの緻密さ、その執拗さと粘り強さ、一手一手の指し手に際しての読み、展開へのひらめき、そして勝負への見通し、そこには全く隙というものが無い。

続いてのくだりでハースは、ケルの考えが間違っていること、その間違いについては明らかな証拠を挙げてすでに証明済みであることを述べている。1928年、リテラーリッシュェ・ヴェルト紙の新年第2号に載せた記事、ハースの第3論文のことである。

あなたの意のままにできたのです、アルフレート・ケルよ—私の証明について納得すること、または拒否することについて。あなたは他人を侮辱するあなたの主張を、はっきりと目に見える形で保持し続けてもよかったわけです、またはきっぱりと撤回してもよかったわけです。あるいは口をつぐむという形で、自分が間違っていたことを認めるという道もあなたにはあったわけです。これら三つの方法は、いずれもあなたの名誉を傷つけることがないという点では同じでした。

*

そうした代わりにあなたは別的手段を取るわけです。あなたが捕らわれている先入観からするとほんの一目見た瞬間に、不透明だと感じられるであろう諸状況から、何らの非難も導き出さず、ただきたくはないとの、つまりこうした諸状況に関するそれ以上のなんらの詳しい情報も持たないままに、出版人の職業上の名誉を傷つけかつ二義性を併せ持っている非難を導き出さず、ただきたくはないとの警告を、尊敬の念を込めて、上品な形式で発したわけですが、一論争に関するあなたの方法が欠陥を有しており、それでもやはり人の心を深く捉えかつ社会的に大きな影響力を発揮するものである点について、ご留意いただきたいとの呼びかけがなされたにも関わらず、

あなたは何らためらうこともなくそうした行動に走ったのです。

ハースの言うように第3論文「我々の演劇批評がその終末を迎えるに当たっての出来事」では、ハースは筆を抑えていた。自分はこれまでに随分と遠慮してきた、自分の方としては何ら落ち度はない、自分は年長の、そして高名な演劇批評家に対して然るべき節度を保って、これまでの自らの論を発表したのである、ハースはこう主張している。すなわち、書き出しの部分で自分はこれ以上の論争を望まない、そう始めたハースであるが、それに続くこのくだりでは、今に至る自分について、すなわちケルとの論争における自分自身の正当性について、ハースはことさらに強調するのである。ハースの本格的な反論の地歩固めである。

「1月30日付けベルリナー・ターゲブラット紙夕刊であなたはリテラーリッシュェ・ヴェルト紙に載った編集メモのことを引き合いに出しておられる」とハースは始める。そして今回の論戦のきっかけになった、「編集メモ」のこと、その「メモ」によると、ムーゼルのエッセイ「ケル60回目の誕生日に寄せて」の結末が「一字一句まで正確」には印刷されなかった、そうではあるものの「著者の了解のもとに、あらたな追加校正については見合わせる」ことになった—ハースは、こう事実関係を確認しておいて、ケルの寸評「拒否される」の一節を、すなわち「ムーゼルは胸のうちではこう思っているだろう、『隠れた意図を感じ取るとき、気分とは言わず、文意についても台無しになる』と。しかしながら—技術的なミスに影響力を行使したのは誰か？例の部分的オーナーか？文学分野の、物言わぬ出資者兼利害関係者たちか？[…]何が飛び出してくるのか、これぞ楽しみというべきであろう」を引用する。ハースは、ケルのこの指摘に鋭く反論する。

これらいかにも秘密めかした謎かけには注釈がつく。すなわち、「例の共同オーナーの一方」とはローヴォルトであり、「文学界の、物言わぬ出資者兼利害関係者たち」とは明らかに有限会社リテラーリッシュェ・ヴェルトの社員たちのことである。

従ってこの段落には以下のような非難が込められているのである。すなわち、編集に関連したことでローヴォルトとリテラーリッシュェ・ヴェルト紙の社員たちからの圧力が入り、ムーゼルの論文の幾分か傷つくこととなり、台無しになってしまった、あるいは少なくともそうした損傷個所の発生について否応なく承諾しなくてはならない事態となった、と。

ハースは慎重かつ緻密に論を組み立てながら、一挙にたたみ掛ける、「あなたは高名なる人物であり、私は無名の人間です。しかしながら我々は二人ながら男子です。逃げ隠れることはよしましょう」。ムーゼルの最終決定稿を印刷することができなかった原因はムーゼル自身にある、とハースは主張する。ムーゼルがこの時期に頻繁に住所を変えていたこと、あるいはムーゼルが然るべき期限内に校正原稿を返却してこなかったためである、とハースは言う。そして、とハースはイタリックで強調する、問題になっているムーゼルの文章の「最終段落についてはそういうわけで、ムーゼルが自筆原稿で書いていたとおりの形で出たのです。一言一言に至るまで、すべての音節についても、すべての綴りについても」。

ハースは二点についてケルに回答を迫る。ケルよ、「リテラーリッシュェ・ヴェルト」本年第2号に引用しておいた私宛ての手紙の中で、私が影の依頼者に依存した出版人であると非難しているが、この非難を正しいと思うか？また、1月30日付けベルリナー・ターゲブラット紙でもあなたは、「リテラーリッシュェ・ヴェルト」に載ったムーゼルの文章は、共同出資者の依頼によ

り、あるいはその影響力が働いて傷つき台無しになった、と非難を繰り返しているが、ここで私が詳細を説明した今でも、この非難を正しいと考えるか？

ハースはケルに何を求めたのか、今回の論争、いや衝突について、どのような結論を期待したのだろうか。この疑問を念頭において、次のくだりを読んでみよう。

回りくどい言い方は止めにしよう…！

念には念を、ということで、もう少し申し上げます。

あなたのお好みは、非常に手の込んだあてこすりを用いての論争術です。あなたの中でまた新たな思いつきが生まれてくる可能性は大いに考えられます。その思いつきは、また新たなあてこすりのきっかけとなるでしょう。最近ヴィルボヴィッツで起きた色情性殺人ははまだ解決がなされていません。ポーランドのオストラウでは一昨日、未成年の子供が陵辱され一今のところ、犯人については分かっていません。これらの事件はともどもに、巧妙な操作を行えば元の形をすっかり失って、あいまいな当てこすりへと姿を変えることができるのです。そして、あなたはそうした当てこすり、アフガニスタンの王を、あるいはローヴェルトを、あるいはひょっとして私を真犯人であると告発しようと考えているのかどうか、そのところはまったく判然としないわけです。前線を霧状ガスで覆い尽くすやり方は、最新の戦略が好む戦闘方法です。

私に関して申しますと、戦場は霧などで覆わずに見通しを保つことが肝要だと思っております。この点是非ともご承知おきます。論点は明確です。二つの質問がその中味です。この質問に対して、あなたは答える義務があるのです。礼儀作法という言葉をご存知ならば、この質問事項には是非ともお答えいただかねばなりません。その他の点については拒否ということにさせていただきます—お望みならば、この二つの件が片付いた後に。あらかじめはっきりさせておきましょう、私はヴィルボヴィッツの色情性殺人犯であり、ポーランドのオストラウの児童陵辱犯であり、その他あなたが望むすべての犯罪の犯人です。私は何らの自己弁護もしません。あなたが私の二つの質問に答えない限りは、遅滞なく、こうした要請を繰り返す必要のない時間内に、お答えいただくことを信じております。

まなじりを決したハースの顔が見えるような、そうした文である。このくだりを読むと、今回の論争でケルの勝ち目はない、と考えることができる。勝ち目どころか、ここでのハースの追求の調子にはケルを根こそぎに否定しようといった勢いが感じられる。ハースの論究は最後の段落を残している。ここでハースはもう一度事実関係に立ち戻り、詳細にケルの非を数え上げる。そして結語。

さらに言うならば、ムージルの論説が我々のもとで台無しにされてしまったと、公の形で非難なざる以前に、あなたは個人的に懇意になさっているこの詩人に、その間の消息を尋ねることもできたわけです。そうであれば、今ここまで私が話してきた事柄を、間一髪のタイミングで耳にすることができたことでしょう。あなたはこれをもなさらなかった。

あなたはこれをなさらなかった、アルフレート・ケルよ。それにはそれなりの理由があるのです。中途半端で分かりにくいあてこすりや両義的な言葉遊びとに付随している薄明かりのほうが、率直で、明快な、あるいは即物的に裏付けられた言葉よりも、あなたに合致しているからです。優れた批評家であるケルとこうした風に話さなければならないことを、残念に思います。

ヴィリー・ハース

徹底的にケルを叩くこと、これがこの激しい論説記事の目的であった。食うか、食われるか…、

ジャーナリストの闘いであった。そしてもう一つ、ケルは今回持ち上がった騒動で、ハースの名を挙げる事を極力避けて、論争を展開している。ハースの名が挙がっているのは、ケルが「リテラーリッシュ・ヴェルト」編集部御中、としてハースに宛てて書いた手紙の中だけである。—ハースは、操り人形であり、その人形を影で操っている黒幕こそはローヴォルトである—これが、ケルの言わんとするところであった。操り人形は相手にする価値なし、とのケルの考えに気付くに連れ、ハースの中に怒りの高エネルギーがさらに満ちてくるのであった。

Vの2 ムージルの捨て身の仲裁 大岡裁き…

ハースがこの記事を発表した同じ2月20日の新聞の投書欄に、ムージルの書簡形式の文が載った。今回の大スキャンダルのそもそものは、ケルの誕生日を祝うハースの記事が原因であった。同一の作家が、同一のテーマについて全く逆の意味合いの論説を書いた。その落差に、ケルは不快の念を抱いた。ケルを否定的に扱った論が「女優M.ケップケの自殺未遂とアルフレート・ケル60回目の誕生日への祝辞」であり、そしてその同じ新聞にムージルのエッセイ「ケル60回目の誕生日に寄せて」も載ったのであった。そして50日が経過していた。ムージルはこのたびの書簡により、もつれにもつれてしまった騒動の仲介に出た。

アルフレート・ケル、エルンスト・ローヴォルトそしてローヴォルトの作家たちへ
本紙とベルリナー・ターゲブラット紙にその詳細が議論された今回の、ケル-ローヴォルト-ハース-ローヴォルトの作家たちの「ケース」に関連して、私は以下の声明を発表する。

尊敬するケル様！

あなたの前提は間違っております。あなたに関する私の論文の校正原稿について、私のほどした修正の諸点を、リテラーリッシュ・ヴェルト紙の側がしかと待っていてくれなかったこと、このことについては確かに非難の声をあげる余地があります。しかしながら事情についてその詳細を承知している立場から明言いたしますが、ここには悪しき意図について、何らの可能性もないのです。何らの「内部抗争」も存在してはいなかったのであり、またこの出来事、これは確かに起きてしまったわけですが、これに関しては、その背後に二つの作家グループの競い合いが、あるいは不当な影響力が潜んでいるとの主張について、何ら根拠のかけらすら存在していないのです。

事実関係については以上のとおりであります。が、ここで個人的な意見について、一言述べさせていただきますたく存じます。私はエルンスト・ローヴォルトとは長年にわたる知り合いです。その長所、短所も含めて、ということになりましょうか。彼は何かしらの刺激を感じたときには大変な雷を落とし、怒髪天を衝く怒りかたをします。しかしながら、針で刺すような事は決してしない人間です²³⁾。心理学的な理解のために、この点を付け加えさせていただきます。

親愛なるローヴォルト様！

あなたはハース氏に手紙を書き、それを公表しておられる—「私がケルの批評活動を完全に拒絶していること、そしてその理由は、おそらくはケル博士としてもそう考えるに違いないのですが、ただ単に仕事に絡んだことばかりが原因ではないということ、このことについて我々二人は承知しており…」。いまここであなたを相手に、ケルの重要性をテーマに文学上の議論を展開することは全く本来の趣旨ではないわけですが、この点に関連したことで少しばかり申し上げるべきことがあります。批評家としてのケルはあなたの出版社の一部門にとって強力な支柱なのです。あなたの出版社はいかなる傾向、いかなる個人とも特定の結びつきを持っていません。あなたの出版社は対立する人々を受け入れています。いやそれどころか、あなたの出版社の非常にすぐれた特徴はこの多様性にこそ存しており、またこの多様性はあなた自身の天性を通して混合され、一

長谷川 淳 基

つになっていると、私は考えております。ケルは時にあなたの作家たちのうち、いく人かの人を勢いよく叱責し、他のあなたの作家たちを勢いよく賞賛しました。他の批評家たちも同じ事をしました。ただしその割合については正反対であったことについては、あなたも私も良く知っています。そうであるならば、あなたが「ケルを拒絶する」とはどういうことなのでしょう？

個人的にはなるほど譲歩できない人権に関わることも言えるのでしょう。が、状況を考えて、彼の考えが導き出されたことについては誠に無理からぬものがあったということです。そのために彼は、我々の出版社の中に、両立しえない複数の方向性—その一方についてはあなたが好む方向であり、もう一方は却下という闇の中への拒絶—が、存在していると考えたのです。そしてケルの「現在の批評活動」は、あなたの出版社との関連で言う限り、その本質的な部分で、私の名前とも少なからず結びついており、従って続いての、ケルの側におけるリテラーリッシュ・ヴェルト紙に関する誤解に際して—こちらもまた私と結びついているわけですが—ケルが間違っただけで連想に導かれて行ったことについては、まことに無理からぬ点もあったのです。あなたの主張が、一般的な意味合いを持って言われたものではないことを私は確信しております。またその点を明確にした上で、生じた事態を少しでも沈静化して下さるよう希望します。

拜啓 出版社の同僚作家諸氏！

証言するようにとの要請がありました。その第一点、私が「ローヴォルト氏のなんらかの仕事に対し、ないし『リテラーリッシュ・ヴェルト』紙に対し、金銭の援助を行った」「ローヴォルト社ゆかりの作家に知り合い」を持たない点。—これについて証言はできますが、果たして意味があるのでしょうか。つまり、そういう作家が仮に存在した場合に、やはり私はその方とは何の面識もないわけですから。

第二点、エルンスト・ローヴォルトが「天職としての、そして文学的情熱を抱いた出版人」であり、「単なる企業家のタイプとは、考えうる限り遠く隔たっている」ということ。—この証言については、ありがたいと思う気持ちも併せて、また私自身十分に確信を持ってそのとおりだと申し上げます。

しかしながら以下のことについても証言をさせていただきたく思います。すなわち、私はアルフレート・ケルを決定的な、そして極めて重要な批評家であると考えていることについて。それにもかかわらず、今回のことではケルが間違っていたという証言を。彼が、すなわち、なぜ彼が間違えたのかに関して、これを弁護するための証言を。そしてリテラーリッシュ・ヴェルト紙を弁護する証言を。最後に私がこの事件に巻き込まれたことに関しては、ピラトが信仰を持つに至った経緯と同じであること、私としてはこの事件の紛糾により私とケル、私とローヴォルトとの関係が妨害されることは御免被りたい旨の証言を。

ついつい激しい言葉が出てしまいました。火事の火を煽り立てることを望まない者は、これらの言葉が忘れ去られることになるよう、ご協力を。

ローベルト・ムージル (BI, 432ff)

1910年から11年にかけての例の「パーン」をめぐるスキャンダルに際しての、ムージルの行動、そして心情が思い起こされる。当時ムージルはケルのために「芸術における猥褻性と病的なるもの」を書いた。いかにもムージルらしいエッセイである。しかしケルの応援のためということでは、何ほどの力も発揮しえない文章であった。今回のムージルは「パーン」騒動のときは違う。当時の論争は、法律上の決着はさておき、ケルは大勝利を収めた。ケル—世一代の晴れ舞台であった、と言ってもよい。この度のスキャンダルのケルは逆である。ケル終生の最大の汚点ともなりうる可能性があった。

それゆえにムージルは、捨て身でケル救出を図った。ムージルにとってケルとの関係は、そ

の早い時期から恩義の感情にのみ基礎を置くものではなかった。批評家ケルの存在は、一方ではハースの主張する意味合いで、つまり、スター評論家は絶対的な権力を握っている、という意味で、これまでと同様に、この先もムージルにとって欠くことのできない重要性を持っているのだが、他方、ムージルの世界理解、人間理解の上で、とはつまり、その文学形成にとって相変わらず、いや今こそムージル自身の位置を明らかにする陸票として、かけがえのない重要性を有しているのであった。こうしたムージルとケルとの間にはしかしながら、お互いの気持ちのある部分において何時の頃からか、現実的利害の一致を双方了解し合い、限定的な交際を安定して維持していくという無言の約束もでき上がっていた。

ムージルはこの関係を犠牲にして、ケルを救う行動に出たのである。弟子が人前で、師を、粋なスタイルを何よりも尊び、矜持こそを命と思っている師を叱ったのである。この場合のムージルの真剣さ、熱い真情、その心根は、妖精やら魔法使いが現われるロマンチックな世界においてならいざ知らず、何か浮世離れしている。ムージルの「手紙」の文章に、ムージルのこの思いが、ケルへの度外れた愛情があからさまに覗いているがゆえに、收拾の糸口など想像だにできなかった事態が一挙に終息に向かったのである。

さて、ケルとローヴォルトの今回の争いであるが、仲裁を意図したムージルの「手紙」のすぐ下に、以下の「宣誓」²⁹⁾が掲載された。

宣誓

ベルリナー・ターゲブラット第50号掲載の、アルフレート・ケル博士の記事「拒絶」について、ローヴォルト社ゆかりの下記の作家は宣誓を行っていただきたい。

1. 我々のうち誰一人として、ローヴォルト氏のなんらかの仕事、ないしは『リテラーリッシュ・ヴェルト』紙に対して金銭の援助を行ったローヴォルト社ゆかりの作家に知り合いを持たない点
2. 我々は、エルンスト・ローヴォルト氏が天職としての、そして文学的情熱を抱いた出版人であり、単なる企業家のタイプとは、考えうる限り遠く隔たっていることを知っている。我々はアルフレート・ケル博士の誤解を理解できない。

ワルター・ベンヤミン - マルティン・ベラート - フランツ・ブライ - アーノルト・ブロンネン - アルベルト・エーレンシュタイン - ブルーノ・フランク - レオンハルト・フランク - シュテファン・グロスマン - アルフォンス・ゴルトシュミット - フランツ・ヘッセル - マックス・クレル - パウル・コルンフェルト - エミール・ルートヴィヒ - アルフレート・ボルガー - ヨアヒム・リンゲルナッツ - レオ・スレザック - ヴィルヘルム・シュパイアー - ヘルマン・ウンガール - エルンスト・ヴァイス

19人の名前が上がっている。ムージルの名はない。

ムージルは署名する代わりに投書という形の仲裁の文書を書いたのであった。

今回のスキャンダルの背景には、出版社と作家の結びつきの問題があった。新聞と演劇批評家ということでも同じ事情であった。作家が、文筆家が出版社、あるいは新聞社を中心に幾つもの小さな、あるいは大きなと言うべきグループに分かれ、そのいわば分属・分派の状態が、書き物の内容を縛り、ものの見方について、価値観について混乱を引き起こす原因となっている点を、ムージルは1926年10月から12月にかけて、この同じリテラーリッシュ・ヴェルト紙で詳しく考察している²⁹⁾。

VI ケルとハース 最後の応酬と幕引き

ハースによるケルへのいわば鉄槌論文と、そしてムージルの仲裁の投書、これが2月10日に揃って「リテラーリッシュ・ヴェルト」に出た。こじれた騒動、その騒動の当事者たちはベルリンの、従ってドイツの作家・文筆家に対して、決定的な力、影響力を持つ人物たちである。彼らに向かってムージルは、双方、矛を収めるようにと、ペンを振るった。何事にも終わりはあるもの。今回の大騒動も先が見えてきた。

しかしながら、ハースはケルを放さなかった。

2週間後、1928年2月24日、「アルフレート・ケル、リテラーリッシュ・ヴェルト紙の要請に応じる」²⁹⁾のこれまた大きな記事が、同紙7面から8面に掲載された。紙面上での、この記事の組み方であるが通常とはいささか異なる形式になっている。左右二連を一組として使い、その左の連の頭には「ケルは書く」、右側の連には「ハースは答弁する」との見出しがあり、それぞれの見出しの下にケルの文、そしてハースのコメントが印刷されている。二人の文がこのように組まれることで、一言相手が言うごとに、即座にこちらも言い返す—そうした対立状態の緊張と臨場感が演出されていることは分かるのだが、それにしても感情的行き違いの程度がさらに強まったように見え、あらためてジャーナリストの論戦であることを感じさせられる。ハースはものの見え方、視覚の効果については敏感であった。

この内容であるが、今回の大論戦の幕が近いことを意識してか、双方とも自分の言い分をこれまでよりも詳細に、丁寧に書いている。読者からして、これまでもう一つ分かりにくかった表現、あるいはいささつなどについても、この記事によってそのいくつかが明らかになる。この意味では読者にありがたい記事である。読者への気配りばかりではなく、ハースはケルに対し、自分が使ったある単語の意味について、わざわざ欄外に注釈をつける形で説明している。ただし、今回の騒動をつぶさに検証してきた我々には、周知の事情、あるいはやり取りが繰り返されている箇所も少なくない。あらましを見ておくことにしよう。

ケルは書く

I

ハース様、「あなたに応じてもらいたい」とのご要請を頂きましたが、即座に、これは断ろうと、当然にそのような気持ちを抱きました。そのあと、正当性を求める衝動が湧き起り、私の快活な気分はこの行動に場所を譲ることになってしまいました—そして私はご要望に応じることにしました、あなたは「我々は、二人して男子です」とおっしゃる。ほう。

もっとも一つだけはっきり申し上げておくが、事実確認と言うことでは、ローヴォルト氏の試み—宣誓という補助手段を伴う措置、すなわち裁判—のほうが、抑制のきかない、文芸新聞紙上でのあっちへ、こっちへのやりとりよりも、よほど有効というものです。

ケルはこのように始める。続くIIでは、ハースがケルに、今でも自分がローヴォルトに依存し、その影響に左右されているジャーナリストだと考えているかと正した点について、ケルはあらためて例のハースの第1論文と第2論文から文を引用して、「あなたは本当に、本当に、本当に、影響を受けています」と返事をする。しかしケルは、ハースに「あなたに変な下心があったわけではない点は、疑っていません。何となれば、あなたの意識の明晰さについては、まさに一点の曇りもないわけです」と、これまでのケルの調子からはややトーンダウンしている。

Ⅲでは、リテラーリッシュェ・ヴェルト紙に資金参加した作家の名前を、ハースはなぜ公にしようとしなのか、とケルは再度この問題に噛み付く。それに続く文である。

一体に、名を明かさず作家兼共同経営者は、同新聞紙上で自分たちに不利になる記事が載ることを期待して、資金拠出を行うと言うのでしょうか。それよりはむしろ、心の底に抱いた彼らの意志が、例えば間接的であっても、紙上に現れると考えてのことではないのでしょうか。確からしさ、ということと考えるとどちらでしょうか。そして確率的に最もありうること、それはあなたが当然のようにして、自分はそれでも「自主独立に」指揮している、と発言するということです。そういうことなのです—あなたとしては、そういう方向を願っている、と。そして、影響を受ける。(こうした、目に付くことのない関係の確認については、申し立てよりは、証人宣誓という形を取る方が有効である)

ケルがこうまでして、「リテラーリッシュェ・ヴェルト」の「物言わぬ共同経営者兼作家」にこだわるどころに、今回の騒動の根深さ、そしてジャーナリズム、あるいは文筆家の世界の力関係、敵対関係の微妙さを窺うことができる。

Ⅳ—今回の騒動が持ち上がった理由の一つは、ケルがローヴォルト出版に縁のある作家を酷評したことの腹いせに、ローヴォルトがケルを、ケルの劇評のみならず人格についても「拒否する」と公に発言したことである、これは全くのルール破りである、とケルは書く。

Ⅴ—ここでは、ローヴォルトの例の「手紙」にケルは言及する。ローヴォルトがハースを「咎めた」というくだりを挙げて、再度、これぞ「影響」を受けている証拠であると、ケルは主張する。

ⅥはⅤをさらに敷衍している。ハースの主張、すなわち、ローヴォルトは決してケルを人格的に「拒否する」と言ったのではなく、ローヴォルトは、ケルを賞賛するハースの記事を他の雑誌等ではなくて、「リテラーリッシュェ・ヴェルト」でこそ読みたかったのに、それが実現しなかったことについてハースを「咎めた」、とのハース自身の主張について、ケルは、「(ケルを)拒否する」ことと「ケルを誉めた記事を読みたかった…」こととを同時に言うことができるとの説明は、ハースの例の第1論文(「ノイエ・ルントシャウ」の掲載論文)と第2論文(「女優M. ケップケの自殺未遂と…」)とが同じ人物の同じ意識で書かれたものであるとの主張と、好一对であると主張する。次のパラグラフはムーゼルの校正原稿の件である。

VII

私が間違っていた点については、率直に認めましょう。ムーゼルの論文に関する私の発言(「意図を感じると、気分ばかりではなく、文意まで台無しになってしまう」)は、くだんの折りに、書かれてあったものが消去されたのではなく、付け加わったものが印刷されなかったという点に関して、間違っていました。ただし後者の事実については、ムーゼルの説明によると「リテラーリッシュェ・ヴェルト」の側に落ち度があるとのこと。

ハースの捕らわれることのない振る舞いと、経済的な面で、あれこれの勢力に複雑に支えられている出版物での彼の振る舞いと、この件との関連では、何ら言うべきことはありません。

このケルの文から、ムーゼルが書こうとした最終原稿は、今我々が読むことのできる文章に、何がしかが追加されたものであることが分かる。ケルは自分の非について、認めざるをえなかつ

た。次は短い。

VIII

総計—私はハースを「罪のある人」とは考えない。そうではなく（残念なことに、信念というものを持ち合わせていない）友人と思っている—この友人が意識していないその運命について、私は同情する。

IXで、ケルは再度「党派的な出版商人」を非難する。そしてこう続ける。

IX

[…]

奇妙なことだ！ビジネスマンが声明を出して、私のような一批評家を「完全に拒絶」したときに、19人も文筆家が、私に対しなんら非難の種など持っていないにも関わらず—直ちにこの、いずれにせよ共通の利害関係にあるこの商人を応援するのである—一人のドイツ人作家を敵と見なして。

この人たちの中には、私が大事だと思う人々もいる。

20人ではなく、19人である。そして、以下のように結ばれている。

X

あとがき—以上の文については、強制されて（「我々は、二人して男子である」）「リテラーリッシュ・ヴェルト」に寄稿することになったものである。そういうことで、これについての謝礼は（遅滞なく）お支払いいただきたい。総額を、私の名で人権連盟に振り込んでいただければ、大変にありがたく存ずる次第です。

ハースの一つ一つの応答は、これまでの通りに厳しい。かつケルの文章と比べて、3割ほど量が多い。その書き出しは以下のとおりである。

ハースは答弁する

Iへの注

拝啓ケル博士

あなたの中の優れた方の自我が、本来のあなたそのものである皮肉への衝動を打ち負かしたことを、この上もなく嬉しく思います。皮肉への衝動については、我々は、二人して男子です、との私の言葉に向かって、ただ一言「ほう」と言った点においてだけ、いまだ残っていますね。心のこうした浄化について、私の手紙が役立ったことについては、自分自身、得意な気持ちを抱いても許されるでしょうね。ちなみに、差し上げた手紙には、もしもあなた様からの返事が届かない場合には、「リテラーリッシュ・ヴェルト」紙上で徐々に厳しい催促を致しますと、書かれていたわけです。

それにつけても、本当にびっくりしました。ローヴォルトが取った民事、並びに刑事訴訟の方法を、あなたが正しいもの考えるという点です。もしも、おっしゃっておられる通りならば—何故にあなたは、ローヴォルトとケルを巡るこの裁判を個人的な干渉で、妨害しようとしたのでしょうか。

ケルは譲歩しており、元気がない。ハースは新たな材料でケルを追撃しようとしている。ハー

スの応答で特に目に付く部分は、「VIへの注」で、ケルが酷評した作家はアーノルト・ブロンネンであること、エルンスト・ローヴォルトはブロンネンを高く買っていたこと、ローヴォルトはこれまでの出版業人生において、いつも儲けのことなどは度外視して、能力のある作家のために尽力してきたこと、このローヴォルトを馬商人、すなわち博労に譬えていることについては決して聞き流すことはできない、ハースはそう応える。

「VIIへの注」ではムージルの校正原稿の件について書かれている。詳細を見ておこう。

VIIへの注

アルフレート・ケル、よろしいでしょうか。ムージルの件について、あなたのやるべきことは撤回し、謝り、そして黙る。それだけです。あくまでも不正があったというように、この件を歪曲しようとなさるなら、あなたはこの件で、ただ「悪意を抱いて」いるだけです。アルフレート・ケルよ、正々堂々とやりましょう。この件については、正しいとか、間違っているとかは全く問題にもならないことです。事実がどのようなものであるか、あなた自身、つぶさにご存知のことではないですか。わずかばかりの本文の訂正—それらは我々の側にとってみればムージルの決定稿と考えていた原稿に、追加の修正をしたものですが—これらが届いたときは、時すでに遅し、発行部数の大半がすでに刷り上っていたのです。

そして1928年3月5日、ベルリナー・ターゲブラット夕刊に「平和条約締結」²⁷⁾が掲載された。ケル60歳の誕生日を機に生じたローヴォルト、ハースとケルとの間での4ヶ月にわたる論戦の終結宣言であった。

平和条約締結

友人サイドからの仲介措置がなされ、その結果アルフレート・ケルと出版社主エルンスト・ローヴォルトとの間で生じていた私闘は幕が引かれることになった。議論が決着を見たことについての双方の宣誓：リテラーリッシュェ・ヴェルトに寄せた論説の中で私が使用した「拒絶する」との言葉は当然のことながら、ある若い作家たちを巡って我々二人の間に存在する意見の対立にのみ関係したことである。ケルの人格を私がどれほど高く評価しているかについて、何もあらためてここで言う必要はない。すなわちケルの評価については、文学と芸術にセンスを持つ現代人にとって、いわば自明だからである。ただ、彼に対して、何か非友好的な意味での圧力を、私がリテラーリッシュェ・ヴェルトにかけようと考えていた、との誤った考えをアルフレート・ケルが抱くに至ったことについては、この上もなく遺憾に思う次第である。アルフレート・ケルからは、然るべき賞賛を持って迎えられることのかなわなかった数人の作家たちに対し私は愛を持っていた。とはいえ、この愛が、異なる考えを持つこの批評家をつまずかせてやろう、との考えの誘因になることは過去、現在にかけて決してなかったのである。批評家としての、文学者としてのアルフレート・ケルの活動に捧げられている、リテラーリッシュェ・ヴェルト紙編集部の方針について想いを馳せるにつけ、そうした試みが何らかの効を奏する見込みがあらうとは、いささかなりとも想像できない。

エルンスト・ローヴォルト

*

以上の言葉に以下の言葉を加えて頂きたい：

私がローヴォルト社の幾つかの問題点について批評したとき、自明のことながら、私はその批評をもって俗世の神聖不可侵の存在に、近づきすぎたということはなかった。二つの党派に共通の友人たちにより、エルンスト・ローヴォルトをその職業において駆り立てているものは、ただ単

に商業上の目的だけではないことが明らかにされた一友人諸氏は彼の理想主義をはっきりと分かる形で、様々な作家たちの支持を数値化して示すことによって、証明した。「前払い」—この言葉は私の感情に照らすと、一切を神聖なものに変える力を有している。そして、この前払いということが、そこでは注目に値する額で行われていたのである。こうした出版社主を相手に個々の点について議論をすることは、尋常さを欠いた今回の件の経緯からして、善悪を区別する私の判断力にとって不適切なものである。ローヴォルト氏によって企てられていた裁判について、私はこれを妨げる何らの行動も取らなかったわけであるが、私はこの平和友好的な処理に同意する。

アルフレート・ケル

論戦の終結にムージルの「投書」が決定的な役割を果たしたことについては、ローヴォルトとケル、この二人の声明文の内容からして明らかである。裁判沙汰も回避された。ケルにも大きな傷は残らなかったようだ。

1927年から28年にかけての冬、ケルはまたもやベルリンを、ドイツを揺るがす大きな論戦を構えたのであった。この論争を開始するにあたり、ケルは勝ち目についてどのように読んでいたのだろうか。詰まるところは読者の目、読者の判定である。自らの正当性、自分の側の正義を訴え、読者の、大衆の支持を獲得すること、ジャーナリストであるケルの関心はただこの一点にある。

人が想像し、夢想し、そして何かを目論む。それはまだこちら側の世界である。そして、実行…。あちら側の世界…。幼年学校生徒テルレスは、一体なぜ、どのように人はこちら側の世界からあちら側の世界に決定的な一歩を進めることができるのか、なぜバジーニは盗むことが「できた」のか、について深く思い悩む。テルレス自身にも、あちら側の世界へ飛ぶ瞬間がやってくる。テルレスの中で「ああ、これは僕じゃない…」との声がするのであった。

ケルの今回の論戦開始にあたっては、こうした存在論的な跳躍などは何もなくなかった。勝ち負けということでは、ケルにしても絶対の見通しはなかったであろう。その限りでは、ケルはバジーニのように、テルレスのようにこちらの確実な世界から不分明の溝を向こう側へ向かって跳んだのである。溝の正体、その深さについては分からない。しかしケルは跳躍の助けになる長い棒を手にしていて、ムージルである。ケルはムージルを頼みに、今回の大論戦を開始したのであった。ムージルを梃子に、ムージルを味方に頼んで、ムージルを勝利の拠り所として、戦いを始めたのであった。ムージルには恩を売ってある、自分は彼の師である、彼は自分の側につく、そう彼は考えた。危ういながら一危うくてもよいのである—着地については計算されていた。

しかしムージルにそうした期待をかけたことは、ケルの計算違いであった。ケルは考え違いをした。ムージルはリテラーリッシュェ・ヴェルト紙に停戦を仲介する手紙を書いた。「パーン」の騒動のときもそうだったのである—ムージルはケルの期待していたものを書かなかった。

今回書いた「手紙」も、ケルに対して厳しい内容のものであった。この限りではケルはムージルに裏切られた。少なくともケルがそう思い込むであろう場面ではあった。

もっとも、この「手紙」についてはケル自身がその内容を、少なくとも概要について事前知っており、ムージルがその文章を公表することをケル自身も認めていた。期待もかけていた。先述の通り、ケルは「ローヴォルト社の作家であるローベルト・ムージルがこの件で発言することについては注目に値するものと思われる」と書いている。この限りでは、ケルがムージルを頼みに今回の論戦を開始したことは、差し引きという考え方をすれば、やはりムージル

は最終的にケルの意向を汲んで事を収めようとしたわけであり、ケルの当初の考えはそれなりに正しかったといえることができる。ケル自身もそう考えたであろう。

しかし、である。ムージルのこの「手紙」は、先のハースの「ケルの攻撃」の文章と同じ日に「リテラーリッシュ・ヴェルト」紙に載った。ハースは、受け取ったムージルの「投書」の原稿を脇に置いて、これを入念にながめつつ、自らの記事に意匠を凝らした。そのハースの論説は一面である。結果、ハースは正論を持ってケルを追求し、非難し、追い詰めている。正論と言っても、ハースもまたジャーナリストには違いなく、ムージルを「ケルと親しいムージル」と決め付けた上で、論を展開する手法はケルのそれと変わるところはない。そこそこに、胡散臭いレトリックも紛れ込んでいる。しかしケルとハースの勢いの違いは、今やはっきりと異なっている。ムージルは、まあまあ双方ともそれぐらいにして…、という論調で仲介したのであったが、ケルとハースのどちらに理屈があるかについては、読者の目からして判定は明らかであったろう。

ケルはあらためてこの日、弟子ムージルに不満の気持ちを抱いたに違いない。この同じ日の新聞で、ムージルは喧嘩両成敗という趣旨の記事を書き、ハースはケルを徹底的に弾劾する。ムージルにしてもしまった、と思ったことであろう。ムージルが、そうしたいわば良心の咎めを感じたであろうことは、この事件が一段落ついて以降のムージルとケルの交流の様子から窺い知ることができる。

ケルは今、事件の決着の仕方についてムージルに不満を感じた。そう推測することができる。推測の理由は二つある。この直後の時期、ケルがウィーンを訪問する際に、彼がムージルに取った態度がその一つである。これについては、稿を改めて詳述することになる。もう一つの理由は、ハースの証言である。ハースはリテラーリッシュ・ヴェルト紙編集長を務めた時代について、回想録に書いている。その中の一節で、彼はこの時のムージルの振る舞いに対する感謝の気持ちをつづっている²⁸⁾。

ケルはムージルの仲裁に不満を感じたのであった。しかしながら、である。このときは、この刹那はそうであったろう。しかし、ムージルは仲介に成功したのである。その仲介の文章で、ムージルは両者を諷め、かつケルについてはその能力と実績をあらためて力強く、美しい言葉で評価した。ムージルの仲介により勝負は引き分けということに落ち着いた。ケルはこのとき圧倒的に分が悪かったにもかかわらず、である。1927年から1928年にかけての冬に起きた大スキャンダルの幕が下りた。

注

ムージルのテキストは以下のものを使用した。

Robert Musil: *Prosa und Stücke, Kleine Prosa, Aphorismen, Autobiographisches, Essays und Reden, Kritik*. Hrsg. v. A. Frisé, Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1978. (本文中ならびに以下の注でPと略記し、その後にはページ数を記す)

Robert Musil: *Briefe*. Hrsg. v. A. Frisé, Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1981. (本文中ならびに以下の注でB I, B IIと略記し、その後にはページ数を記す)

- 1) トーマス・マン全集・別巻「年譜」533-534頁
- 2) Joseph Chapiro: *Für Alfred Kerr. Ein Buch der Freundschaft*. Berlin (S. Fischer) 1928
- 3) 拙論：ローベルト・ムージルとアルフレート・ケル—出会いと別れの光景—, 椋山女学園

- 大学研究論集第30号「人文科学篇」1999年3月発行, 140頁-146ページ。同, 拙論: ローベ
ルト・ムージルとアルフレート・ケル—調和の文学創造と人間関係の不調和, 椛山女学園
大学研究論集第33号「人文科学篇」2002年3月発行, 57, 58頁。
- 4) *Redaktionelle Notizen*. „Die Literarische Welt“, Nr. 3, 20. Januar 1928, S. 10
 - 5) *Zuschrift an die L. W.*. „Die Literarische Welt“, Nr. 4, 27. Januar 1928, S. 8
 - 6) Alfred Kerr: *Abgelehnt*. „Berliner Tageblatt“, Abend-Ausgabe, Nr. 50, 30. Januar 1928, S. 6
 - 7) *Vgl. Karl Corino: Robert Musil. Leben und Werk in Bildern und Texten*. Reinbek bei Hamburg 1988, S. 179
 - 8) Alfred Kerr: *Die Welt im Drama*. 5 Bde. Berlin (S. Fischer) 1917, und *Die Welt im Licht*. 2 Bde. Berlin (S. Fischer) 1920
 - 9) *Vgl. Walter Huder: „Wer hat die schönsten Schäfchen... Trotz Militärmusik?“ Alfred Kerrs kritisches Temperament gegenüber der Weimarer Republik*. In: *Weimars Ende*. Hrsg. v. Thomas Koebner, suhrkamp taschenbuch materialien, 1982, S. 308
 - 10) Willy Haas: *Der Selbstmordversuch der Schauspielerin M. Koepcke und unsere herzlichsten Glückwünsche zu Alfred Kerrs 60. Geburtstag!* „Die Literarische Welt“, Nr. 51/52, 22. Dezember 1927, S. 1f.
 - 11) Alfred Polgar: *Theater*. „Der Morgen“, 5. Dezember 1927, S. 4
 - 12) Rainer Maria Rilke: *Puppen. Zu den Wachs-Puppen von Lotte Pritzel*. In: Rainer Maria Rilke: *Sämtliche Werke*. XI. Bd., Hrsg. v. Rilke Archiv, Frankfurt am Main (Insel) 1966, S. 1069
 - 13) *Mysteriöse Erkrankung der Schauspielerin Margarete Koepcke. Selbstmordversuch oder Leuchtvergiftung?* „Die Neue Freie Presse“, Nr. 22712, 9. Dezember 1927, S. 3
 - 14) *Die Erkrankung der Schauspielerin Koepcke*. „Die Neue Freie Presse“, Nr. 22713, 10. Dezember 1927, S. 7
 - 15) *Vgl. Herbert Kirnig: Alfred Kerr und Alfred Polger*. Dissertation (Universität Wien) 1950
 - 16) *Vgl. Willy Haas: Literarische Welt. Erinnerungen*. München (Paul List) 1957, S. 34. ハースとカフカが連れ立って映画に通ったことが回想されている。その他, ツィシュラーは, その労作でカフカ文学への映画の影響を明らかにしている。ハースのこの回想も引用されている。ハンス・ツィシュラー『カフカ, 映画に行く』(瀬川裕司訳, みすず書房) 162ページ。
 - 17) *Vgl. Karl Rössing: Mein Vorurteil gegen diese Zeit*. (Büchergilde Gutenberg) 1932. 同じく上記拙論「一出会いと別れの光景—」139頁。
 - 18) Willy Haas: *Ereignisse vor dem Ende unserer Theaterkritik*. „Die Literarische Welt“, Nr. 2, 13. Januar 1928, S. 1f.
 - 19) Willy Haas: *Kritiker Kerr*. „Die Neue Rundschau“, 38 Jg., Bd. II, 1927, S. 640-646
 - 20) *Vgl. A. Kerr: Theater in Berlin*. In: Alfred Kerr: *Essays, Theater, Film*. Hrsg. v. H. Haarmann und K. Siebenhaar, Frankfurt am Main 1991, S. 196-212 フロベールの文は, 同書207頁に引用されている。
 - 21) A. Kerr: *Nachtrag*. „Berliner Tageblatt“, Abend-Ausgabe, Nr. 62, 6. Februar 1928, S. 2

- 22) Willy Haas: *Die Angriff Alfred Kerrs*. „Die Literarische Welt“, Nr. 6, 20. Februar 1928, S. 1f.
- 23) 「針」で刺す, という表現に関してはエッセイ「仕立屋のメルヘン」(1923年11月21日)にあり, そこでは文筆家のペンは仕立屋の針であり, 魂の宿る道具として描かれている。Vgl. „*Das Märchen vom Schneider*“, P, 627-629
- 24) *Erklärung*. „Die Literarische Welt“, Nr. 6, 20. Februar 1928, S. 9, od. BI, 434
- 25) Vgl. „*Bücher und Literatur*“ (15., 22., 29. Oktober), u. „*Bücher und Literatur*“ (26. November, 10., 17. Dezember), P, 1160-1180
- 26) *Alfred Kerr stellt sich der „L. W.“*. „Die Literarische Welt“, 24. Februar 1928, S. 7f.
- 27) *Friedensschluß*. „Berliner Tageblatt“, Abend-Ausgabe, Nr. 110, 5. März 1928, S. 2
- 28) 「どこの馬の骨とも分からない新参者に, こうした地位を任せるということについては, 誰も深く考えたわけではなかった。そしてその挙句の結果は, 私が文壇で少し名声を得たとき, みんなが私に襲いかかってきたのであった。あの当時には遠慮というものがあった。

攻撃はときどき, 私にはほとんど考えられないぐらい残酷で呵責のないものであった。私は深く傷つき, そのことでたいそう苦しんだ。多くの批評はおそらくは正当なものであった。だが残念ながら私にはあまりに遅れてわかったことだが, ほんとうは権力争いにほかならなかった。津波のような罵倒に対して何を言うべきであったろうか。

ほんの少数の人々がいてくれて, その人たちはある程度私に気持ちの抛り所を与えてくれたのであった。ローベルト・ムージルはほかの点では冷ややかで, 特に人の心のうちを察してくれるというような人間ではなかったが, そうした人々の一人であった。」

Vgl. Willy Haas: *Literarische Welt. Erinnerungen*. S. 158